

捻くれ少年のラブコメディ

リョ

俺ガイルとニセコイのコラボです。

他にも書いている人いるけど、完結したのとかあまり見たことないので完結でき
るように頑張ります。

俺ガイルキャラは八幡しか出てきません。ヒロインは小咲の予定。

時系列は千棘が転校してきて少しだったくらいにします。鶯はまだ来ていません。

目次

11話	10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話
.....										
76	70	60	54	45	32	27	19	13	7	1

23話	22話	21話	20話	19話	18話	番外編 新婚生活!?	17話	16話	15話	14話	13話	12話
.....												
191	179	165	156	146	138	129	123	113	102	96	88	83

24話	198
25話	209
26話	221
2章	227
27話	227
お気に入り1000突破記念家族	234
28話	244
29話	249
30話	257
31話	262
最終話	268
アフターストーリー①	274

1話

「引越し？」

ある日、親父から突然そんなことを言われた。

仕事の都合で転勤になったそうだ。

ちなみに東京。隣の県じゃねえか。

そういえば昔1年間だけ東京に住んだことあったな。

「まあお前は別に友達とかいないし大丈夫だろ？」

「いや、まあそうなんだけど……」

転校することになるじゃん。自己紹介とか嫌なんだよな……

「俺どこの高校行けばいいの？」

「ああ。それなら俺の知り合いのツテで凡矢理高校ってところ通うことになった。学力もお前と同じくらいだから気にすることはない」

「まあそれならいいけどよ」

そしてやってまいりました！東京！

今日から新たな高校生活が始まる。今はもうすでに学校についており、先生が名前呼ぶらしいのでそれを待っている。自己紹介とか必要ないのに。どうせ1人で適当に過ごして終わっていくんだから。

いろいろ脳内で考えているといつの間にか俺の名前が呼ばれていた。

「よし、じゃあはいってこい！」

あー！来ちゃったよ！

「えっと、比企谷八幡です。千葉から引越してきました。よろしくお願いします」
言えた！噛めずに言えたよ！……なんかバカみたいだな。

ガタンッ

俺が自己紹介を終えると突然机が倒れる音がした。

「ん？小野寺大丈夫か？」

「は、はいっ！す、すみません！」

「？比企谷。お前の席は小野寺の隣だ。困ったことあったら小野寺に聞け」
よりによって女子かよ……

「よ、よろしくね！比企谷くん！」

「え？あ、おう。よ、よろしく」

最初は俺でも質問タイムとかはあった。

でも適当に答えていたら自然と消えていった。

「転校すると絶対最初質問攻めされて困るよな」

やっと落ち着けると思ったらまた誰か話しかけてきた。しかも結構いるし。

「俺、一条楽！よろしくな！比企谷！」

「私は桐崎千棘！よろしくね！」

「俺は舞子集！気軽に集でいいよ！八幡！」

「宮本るりよ。よろしく、比企谷くん」

そんなに名前覚えられるか。

「あ、おう。よろしくな」

まあ最初だけだろ。適当に返事しとこう。

「比企谷の家ってどの辺なんだ？」

「ああ。近くに和菓子屋があったぞ？」

「和菓子屋？それって……」

「ひ、比企谷くん、そのお店の名前ってオノデラって名前？」

「確かそうだったな。そういえば名前同じだな」

「だってそこ私の家のお店だもん！比企谷くんだったんだね！前たまたま引越しのトラック見たんだ！」

「そうだったのか」

その後も適当に他愛もない話をして終わった。

だが帰りが一番大変だった。小野寺と一緒に帰ろうと言い出したのだ。涙目の上目遣いだったので断れなかった。でも小野寺はそんなにめんどくさいタイプでもない。優しいようで大人しそうで、まさに男子からみたら女子の理想って感じ。まあ俺は勘違いなんてしないけどな。

とりあえず今日は疲れたから家に早く帰って寝よう。

翌日

「楽！ どういうことだよ！」

俺が朝教室で読書をしていると、一条も登校してきた。すると舞子がいきなり一条に質問攻めをしていた。

「昨日こいつらが見たんだよ！ 楽と桐崎さんがデートしているところを！」

「見たであります！」

「えっ!?! い、いやそれは……」

「おはようー。どうしたの？」

噂のもう1人の桐崎の登場。

「お、おい桐崎……」

なんか2人でこそこそ話してる。

「もしかして付き合っていないのか？」

「結構ラブラブな感じだったけどな」

「……実は俺たち、ラブラブじゃなくて……超ラブラブカップルなんだよなー！ そ

うだよな！」

「え、ええ！そうよ！ダーリン！」

「おおー！まさかの一条と桐崎のカップル誕生か！」

なんか教室が騒がしくなった。

…… っていうかなにあの演技？なんでみんな騙されてんの？

続く

2 話

なんなんだこのあからさまにバレる演技は。

なんでみんな騙されてんの？それともわかっててのってるのか？

「一条くん……」

なんか小野寺が複雑な顔をしている。……あーなるほど。青春だねえ。

翌日

「それでな！……」

なんでこいつら（一条と舞子）はいつも俺のところに来るんだよ。

ひっそりと暮らしたいのに。一条なんて今注目の的だから余計に嫌だ。

「ちよっと一条くん、いいかしら？今日あなたの部屋で勉強会したいのだけど、構わない？」

「……はあ!？」

「なあ」

「ん？なんだよ比企谷」

言いたいことはひとつだ……

「なんで俺まで勉強会行かなくちゃならんのだ」

「まあいいじゃないのー！男子3人、女子3人でさ！丁度いいし！」

合コンじゃねえよ。

「じゃあ早速始めようぜ」

まあ宿題今回多いし別にいいか。

『……』

「ねえ、一条くん、小咲わからない問題があるらしいから見てほしいんだけど」

「る、るりちゃん!？」

「え？別にいいけど……」

「お、お願いします……」

……リア充どもめ。

「すまん。俺この問題わかんねえ」

「そこは一番上の公式を使うのよ」

「なんだよ桐崎。お前は自分の宿題を……」

「終わったわよ？」

「は!? お前今日結構量あるぞ!？」

「ほら」

「……全部終わってる」

「桐崎さんってアメリカでどのくらいの成績だったの？」

「うーん、通知表はオールAだったわよ？」

オールAってめちゃくちゃいいじゃねえか。天才かコイツ。

「そういえば桐崎さんと楽ってどのくらい進んだの？」

「ぶーっ!？」

「キスとかはもう……」

「ちよっとこい! ついでに比企谷も!」

「なんでだよ……」

「付き合ってない？」

「ああ。家の事情で偽の恋人やってるんだよ」

「いや、俺わかってたけど。舞子も気づいてるんだろ？」

「うん」

「はあ!？」

「でも面白そうだったからねー！気づかないふりしてた！」

「はあ……」

「ま、ほかの奴らはほんとに気づいてないみたいだし大丈夫じゃないか？」

「そうだといけれど……戻るか」

「何話してたの？」

「ちょっとな」

勉強会も終わり、今は小野寺と帰っている。

「それでね、るりちゃんが……」

いつも小野寺から話を振り、俺は返事をするだけ。何故小野寺は俺なんかと帰ろうとするのだろうか。

「…なあ小野寺」

「？なあに？」

「俺なんかと帰ってて楽しいか？」

「え？」

「いや、帰れる時はなんかいつも一緒に帰ってるだろ？途中までは宮本もいるけど」

「…比企谷くんはいやだった？」

「いや、そうじゃねえけど…小野寺は嫌じゃないのか？」

「いやじゃないよ？比企谷くんと話してるの楽しいよ？比企谷くん、ちゃんと返事してくれるし」

「まあそれならいいけどよ……」

「これからも一緒に帰ってもいい？」

「…気が向いたらな」

「…ふふっ、捻デレさんだね」

ドクン

……なんだ今の？小野寺に捻デレって言われた途端なんか……気のせいかな

「誰が捻デレだ。俺のどこにデレがあるんだよ」

「そういう割には誘った時はいつも一緒に帰ってくれるよ？」

「…… たまたまだよ」

「…… そっかー、ならそういうことにしとくよ」

「おい、ほんとにわかってるのか？」

「わかってますよー」

「…… ったく」

まあ小野寺と帰るのもたまには…… いいかな。

続く

3 話

「よし、じゃあ今日は小野寺と比企谷が日直だな。よろしくー」

黒板消すのって意外と辛いよな。チョークの粉とかがさ。

「んゝっ」

小野寺が黒板の上の方を消すのに苦勞している。

「小野寺、上の方は俺がやるから無理するな」

「え？あ、う、うん。ごめんね」

「比企谷、小野寺！後でプリント運んでくれ！」

それ日直関係ないだろ。パシリか？サボろっかな。

「サボったら宿題の量倍な」

……無理でした。

「意外と重いね」

「まあな。半分持つぞ？」

「べ、別にそういう意味でいったわけじゃないから大丈夫だよ！」

「いいから」

「う、うん。ごめんね」

「……なあ、その謝るのやめたら？」

「え？」

「小野寺別に悪いことしてないのになんで謝るんだよ？」

「迷惑かけちゃったから……」

「それならお礼とか言った方がいいぞ。その方が一条とかも喜ぶぞ」

「!? な、なんで一条くん!？」

「いや、お前の普段の行動とか見てたら一条のことすきなまゐるわかりだぞ」

「……一条くんに気づかれてないよね？」

「あいつ鈍感だから気づいてないだろ。俺も別に誰かに言うつもりないから気にすんな」

「……じゃあ比企谷くんは好きな人いるの？」

「は？ なんでそんなこと聞くんだよ」

「わ、私だけ知られてるなんてなんかずるいもん！」

「…別にいい」

「そうなの？ 私たちのクラスとか可愛い子多いからいるのかと思った」

「そんなくだらんこと聞いてないで前向け。転ぶぞ」

「え？ う、うん。きゃっ!？」

言ったそばから小野寺が階段から落ちそうになった。

「小野寺！」

俺はとっさに小野寺の手を掴んで抱き寄せた。このままだと俺まで落ちる！ 小野寺だけでも怪我をしないように俺が地面側にならないと！

トタトタッ

!!

… 小町、俺死んだかも。

… ううっ。どうやら生きていたようだ。背中すごい痛いけど。

「あら、起きた？」

「保健室か」

「ええ。あなたが階段の下で倒れてるのを一条くんが運んでくれたのよ。男の子ね。小野寺さんをかばったんでしょ？」

「誰でも階段から落ちそうになってたらそうするでしょう」

「そうかしら？ なかなかできないわ。一条くんには明日お礼をいうことね。小野寺さん、まだ目覚めてないみたいだから。起きたら戸締りして鍵を閉めておいてくれない？ 私ちよっと用事があるから。比企谷くんも何日かすれば痛みも引くと思うから」

「はい。すみません。わかりました」

……はあ。小町から連絡来てるな。まあ普段すぐ帰るから遅くなってたら心配するわな。メール送っておこう。

「んんっ……」

小野寺起きたか？

「……ハチくん……」

ドクン

まただ。胸がざわつくような感じ。それにハチくんって……気のせいに決まって

るか。小野寺と会ったの転校してきたのが初めてのはずだし。そろそろ起こした方がいいな。

「小野寺、小野寺起きろ」

「……あれ？ここは……」

「保健室だ」

「そうだ！階段から落ちて……ハチくん大丈夫だった!？」

ドクン

「え？あ、ああ。数日すれば治るって……なに？ハチくんって」

「え？……！な、なんでもないよ！ちよ、ちよつと言い間違えちゃったの！あはは！気にしないで！ね！」

「お、おう。とりあえず帰るか」

「そ、そうだね！」

「そういえば一条のやつが保健室まで運んでくれたらしい。明日お礼言っとけ」

「そうだったんだ。でもお礼言うのは比企谷くんもでしょ？」

「小野寺から言っといてくれ」

「ダメ！ちゃんと自分で言わないと！」

「わ、わかったよ。ていうか離れる近い」

「！ご、ごめんね！あ、家に着いた。また明日ね！比企谷くん！」

「おう」

… さっきの胸のざわつきはなんだったんだろう。

続く

4 話

今回は小咲視点

「小咲」

「あ、るりちゃん！」

今日はあるりちゃんと喫茶店に行く約束をしていました。

それは私のある悩みを相談するためです。

「それで、相談って？恋愛事？」

「う、うん。…私が一条君のこと好きなのは知ってるよね？」

「ええ。早く告白すればいいのに」

「と、とりあえずその話は置いて…実は私、他にも気になってる人がいるかもしれないの」

「…もしかして比企谷くん？」

「えっ!？」

「凶星ね。最近はあなた達仲良さげだからなんとなく言ってみたけど、まさか当たってるとはね」

る、るりちゃん鋭いなあ……

「そ、それでね。私、比企谷くんとは1度昔に知り合ってるの」

「え？」

「小学校の頃なんだけど、私当時いじめられてたんだ。ほんの一時期間だけだね。でもそこに比企谷くんが転校してきたの」

「そんなことが……」

「それでね、比企谷くん最初はみんなから質問とかされたり注目されてたんだけど、いつの間にか周りには静かになって。それで数週間たったくらいからある日急に私へのいじめがなくなったの」

「良かったじゃない」

「うん。でも、その数日後に見ちゃったんだ。私をいじめていた人達が比企谷くんに暴力ふるってるのを」

「…なるほどね。標的が変わったってこと」

「うん。その時なんとかしようって思ったけど、怖くて何も出来なかった。でも、ひとりが寂しいのは私が一番わかってたから私だけでも比企谷くんのそばにいうって思ったの」

「なんか小咲らしいわね」

「そ、そうかな？…それで、比企谷くん、最初は疑ってたけどだんだん心を開いてくれて。多分その時一番仲良かったの比企谷くんだったと思う。比企谷くん、見た目は少し怖いかもしれないけど優しくて、日直の時とかプリント運ぶのとかも手伝ってくれたり、ものをなくした時とかも一緒に探してくれたんだ。多分私その時比企谷くんのことが好きだったのかもしれない」

「なるほどね」

「でも、私と比企谷くんが仲良くしてるのを誰かに見られたみたいで、からかわれるようになったの」

「まあよくあるわよ。そんなこと」

「そこまではいいんだけど、また私もいじめられるようになったの」

「また？私、1回そのいじめっ子たちをぶん殴りたいわ」

「お、落ち着いて！…いじめはどんどんエスカレートして、ものとも取られたりして、暴力とも振るわれたりしたの。周りから見えない場所にあざともできちゃって」

「ひどいわね…」

「それでね、ある日比企谷君が突然「もう俺に関わるな」っていったの」

「比企谷くんが？」

「うん。なんで？って聞いても教えてくれなくて。それを聞いた次の日から比企谷くんは私と関わりなくなつたの。それでひとりで考えて、もしかしたら比企谷くんは自分と関わるようになってから私がいじめられてるから関わりなければなくなるって思ってると思ったの」

「突き放したのは小咲を助けるためってこと」

「うん。…でもいじめは続いたんだ。ある日ね、そのいじめっ子たちが誰かと喧嘩したような怪我をして教室に入ってきたの」

「いい気味じゃない」

「でも私その時なにか嫌な予感がして。比企谷くんその時まで学校に来てなかったの。いつも私が学校来る時は教室にいたのに」

「たまたまじゃない？」

「ううん… その後も比企谷くん来なくて、先生が教室に入ってきたの。それで先生が「比企谷は親の都合で引越した」って言ったの」

「…… だいたい予想はつくわ。その喧嘩したのが比企谷くんこれ以上小咄に迷惑かけたくないから転校したとかでしょ」

「うん、多分… それから比企谷くんと連絡取れなくなって。その時の私じゃ比企谷くんのあとを追うことはできなかったから諦めるしかなかったの。それからはいじめもなくなって、中学に上がって一条くんやるりちゃん達と出会って」

「それで高校１年になって比企谷君が転校してきて再会したってわけね」

「うん。でも比企谷くん私のこと覚えてないみたいなんだ」

「でしようね。それで、その恋をした男の子と再開してまたその時の気持ちが蘇ってきたってこと？」

「そう、なのかな。でも今の比企谷くんも昔とぜんぜん変わってなかった。ひねく

れてるけど困った時は助けてくれて。とっても優しい人だった」

「それで、今は一条さんと比企谷君どっちが好きなの？」

「わからない……っていうのが本音かな」

「それで気持ちを確かめたいってことね」

「うん」

「……なら一条くんへの告白は中断ね。でもあんた、その鍵のことはどうするつもり？」

「え？……約束は大切だけど、今の私じゃなにも分からないから。今の気持ちを大切にしたい、かな」

「わかったわ。でも小咲がどっちかを好きなのはあなたにしかわからないわ。だから2人と一緒にいられる時間を作ってあげるわ。あとは自分でなんとかしない？」

「うん。それだけでじゅうぶんだよ。ありがとう、るりちゃん」

「まさか比企谷さんと小咲にそんな過去があるとは思わなかったわ。」

「もしかしたらその約束の鍵の相手も比企谷くんなんじゃない？」

「あはは……それはないんじゃないかな？ 小学生ところもそんな話聞いたことなかったし」

「あんたが聞かなかったただけでしょ？」

「まあそうだけど……」

「ま、とりあえず今の状況を考えると1番恋人になれるのは比企谷くんよね。一条くんは桐崎さんと付き合ってるんだし」

「ま、まだそんな恋人とかは早いよ！」

「でも、今の小咲を見てみると、比企谷くんに気持ちが寄ってる気はするわね」
そ、そうかな？ 私そんな素振り見せたかな……

「一条くんと話してる時も楽しそうだけど、比企谷くんと話してる時の方が割りかし一条君の時より楽しそうに見えるわ」

「そう……なのかな」

「まあ、急いでも仕方ないし、少しずついきましよう。小咲のペースで」

「うん！」

ハチくん、思い出してくれるといいな♪

続
く

5 話

今日はできる限り投稿します！

今日は帰って久しぶりに溜まってたラノベ読むか……

「どこやったかな……」

かなり前に買ったラノベを探していると、本棚の奥になにか見つけた。

「ん？……箱か？……鍵穴のついたペンダント？」

こんなの俺持ってたかな……結構高級そうなやつだし。

親父のかな？

「親父、ちょっといいか？」

「ん、どうした？」

「いや、なんか本棚の奥からで出来たんだが……親父のか？俺のじゃないと思うんだが」

「ペンダントか？…これお前のだぞ？」

「は？俺こんなの持ってたか？」

「確か昔まだお前が小さい頃に俺の知り合いの子供たちと遊んでた時に何かの約束をしてそのペンダントもらったって言ってたぞ？」

「…ってことは鍵もあるってことか？」

「そうじゃないのか？しかもこれ見た感じ高そうだし、見つけたのも何かの偶然だから自分で持っとけ」

「わかった。サンキュー」

それにしても俺そんなこと全く覚えてないぞ…なんの約束したんだ？そして誰と？

翌日の帰り

教室に忘れ物した…今日は新作ラノベの発売日なのに。早くしないと売り切れちゃう。あれ結構人気だからな。

俺が小走りで廊下を歩いて、ちょうど角を曲がると…

「きゃっ」

「うわっ…す、すみません。急いでて」

「こ、こちらこそごめんなさい… って比企谷くん？」

「小野寺か」

「どうしたの？」

「いや、ちょっと教室に忘れ物を… 小野寺なんか落としたぞ？… 鍵？」しかも結構古びた感じだ。

「比企谷君もなにか落としたよ？… こ、これペンダント…？ ひ、比企谷くんこれ何で…」

「え？ ああ、たまたま昨日日本棚の奥で見つけたんだよ。なんか昔と誰かと約束した時にももらったらしい。小野寺も古びた鍵持ってるんだな。家の鍵か？」

「… え!? あ、う、うんそうなの！」

「何慌ててるんだ？」

「え？ い、いや別に？ 慌ててなんかないよ？ わ、私がちょっとようじあるからまたね！」

「お、おう」

急にどうしたんだ？

小咲サイド

ど、どういうこと!?!あのペンダント一条くんの持ってるのとそっくりだった！
今まで一条くんが約束の人かと思ってたけど…一体どういことなんだろう…あの時もって聞いておけばよかった…

side out

さらに翌日

「比企谷くんちょっといい？」

「ん？なんだ？宮本」

「私水泳の大会に今度出るんだけど、私のチームで欠員がちゃってね。それで小咲を入れたんだけどあの子泳げないから泳げるようにしてほしいの」

「いや、なんで泳げない小野寺を入れたんだよ」

「私の知り合いに泳げる人がいなかったのよ。だから一番仲のいいあの子に頼んだ

の」

「まあ教えるくらいなら別にいいが…」

「そう。ならよろしくね」

一条とかも後で誘うか。ついでに仕事も押し付けよう。

続く

6 話

まだ半日くらいしかたってないのに3話目投稿しますw

水泳教室当日

「ちゃんとさぼらずきたのね」

「俺をなんだと思ってるんだ」

「小咲もうすぐ来ると思うわ」

「比企谷」

「一条くんも呼んだの？」

「ああ。ついでにもう1人」

「るっりちゃあーん！げふう！」

「な、んで！舞子君までいるの？」

「いやあなんかついてきた」

宮本怖！舞子の奴抱きつこうとしたらかかと落としされてるし。

「る、るりちゃあん！やっぱり無理だよお！」

「おお！」

「あれ!? 一条くん!? それに比企谷くんも!？」

「小咲、今日は泳げるようになるために助っ人を用意したわ。私も練習したいから面倒見れないし。じゃあとはよろしくね」

いっちゃったし…

「あれ？ダーリンも来てたの？」

「え？桐崎じゃねえかなんでお前が」

「なんでって助っ人よ」

「小野寺教えるのに3人も必要か？」

「じゃああんたが帰れば？」

「なんだと？」

「なによ？」

「——サ——サ——」

うるさい奴らだなあ……

「小野寺、あいつらほつといて練習するぞ」

「え？ う、うん…」

「ということで一条頼んだ」

「俺!？」

「小野寺と手繫げれるかもしれんぞ」

「な、なるほど……よし！小野寺！頑張って泳げるようになるうぜ！」

「うん！よ、よろしくお願いします！」

「はい！じゃあまず私が見本見せるわ！」

「泳げんのかお前？」

「ふつ、なめてもらっちゃ困るわ！見ててね小野寺さん！」

ハ"シヤヤヤヤ

速すぎるわ。

「お前見本になる気あるのか」

「え!？」

「さ、流石に今のは速すぎるかな…」

「そ、そんな…」

あーあ、隅の方でいじけちゃったよ。

「はあ… すまん比企谷、俺桐崎のとこいつてくるから小野寺のことよろしく」

「は？」

「もともとお前が頼まれたんだろ？ よろしくな！」

『…』

「じゃあやるか」

「う、うん！」

「まさか顔も水につけれないとかじゃないよな？」

「それは大丈夫！」

「ならまずバタ足からやるか」

「お、お願いします！」

… これは手繋がなきゃダメだよな

「じゃあ手つかむぞ？」

「う、うん」

ギュッ

…うわああ！恥ずかしいよお！なんでこんなに柔らかいの!? しかもちよつと谷間見えてるんだよ！

「そ、それじゃあ始めるぞ」

「は、離さないでね？」

「わ、わかってるよ」

ニギニギニギ

「いいぞ、その調子…」
すると遠くの方から…

「は？」

ゴンッ

舞子が飛んできた。

ニギニギニギ

！

「え？え？うわあ！」

ハヤハヤ

！

「… ったくなんでお前が飛んでくるんだよ」

「いやあ、るりちゃんと遊んでたら、ね！」

「お前絶対ろくなことしてないだろ」

「ひどいなー！ それじゃあ俺はまた行ってくるよ！ 頑張てね！」

「あいつこりんな… 小野寺大丈夫か？ 悪いな手離しちゃって」

「だ、大丈夫！」

「ついでにちょっと休憩しよう」

「そうだね。… あの、比企谷くん」

「ん？ なんだ？」

「その、前にペンダント持ってたよね？」

「ああ」

「それって誰かと約束した時にもらったって言ってたけど… 相手の子のこと覚えてるの？」

「いや、全く。そもそも約束のこと自体忘れてたしな」

「そ、そうなんだ」

「それがどうかしたのか？」

「え？ ううん！ なんでもないよ！ わ、私ちょっと飲み物買ってくるね！」

「あ、ああ」

どうしたんだ？ 小野寺のやつ。そういや小野寺も鍵持ってたよな。

古びてたから家の鍵じゃないとするとなにか大事なもののか？

…まさかペンダントにはまったりしてな。…なんか気になってきた。

ん？ これって小野寺の鍵だよな？ こんな古びたのそうないし…

「比企谷くん、なにやってるの？」

「ん？ 宮本、それに桐崎も」

「…それ、女子更衣室の鍵なんだけど」

「…は？」

…まずい

「す、すみまゴフウ!!」

「ご、誤解だ…」

というか桐崎のやつなんてパワーだよ。一条のやつこんなにくらってたのか。今度から優しくしてやろう。

「比企谷……さすがに」

「俺でもこんなことしないかな」

「ま、待て！誤解だ！女子更衣室の鍵なんて知らなかったんだよ！」

「そんなの信じるとでも？」

「……ま、待って！ひ、比企谷くんはそんなことしないよ！……多分」

「お、小野寺！」

ここに天使がいます！小町に続く天使がいます！

「……今回は小咲に免じて許してあげるわ。その代わりしっかり小咲を泳げるようにしてよ？」

「はい……ありがとな、小野寺」

「別に気にしないで！」

結局分からなかったな……

水泳大会当日

「桐崎！ちゃんと準備運動しなさい！」

「あんたは私の親か！」

あいつら相変わらずだな。

「小野寺、練習を思い出せば大丈夫だ」

「うん！頑張るね！」

「宮本。すまんなビート版で泳ぐのが精一杯だった」

「え？あ、ああまあ大丈夫でしょ。…でもあの子昔から不器用なところあるから、

溺れたりしなきゃいいけど」

「溺れたりなんてそうそう…」

「誰か溺れてるぞ！」

『え？』

…あれは桐崎!?

「あのバカ！」

ハシヤツツツ

！

一条が即座に飛び込んだ。

「ぷはぁ！」

「楽！桐崎さん大丈夫か!？」

「わ、分からね！」

「ど、どうだ？集」

「……息をしてない」

あの顔嘘だな。若干にやけてるし。

「な、なに!？」

「楽、人工呼吸だ」

「は、はぁ!？」

「まあ恋人であるお前がやるのが当然だよな」

「ひ、比企谷まで！」

面白そうなので便乗しました。てへっ！

「……くっ……許せ桐崎」

ついに2人の唇が……

「んんっ」

あー、桐崎目覚めちゃった。

「!?なにやってんのよ!」

「ゴフウ!?」

男子更衣室

「はあ、散々な目にあった…」

「ドンマイ! 楽!」

「元は集のせいだろ!」

「あはは」

「意識ないよりは良かったじゃねえか」

「いや、まあそうだけど…! お、おい比企谷」

「ん? なんだよ?」

「そ、その手にあるの…」

「ペンダントだけど？」

「ちよ、ちよっと見せてくれ！」

「ほら」

「…鍵穴は少し違うけど…比企谷、これどこで!？」

「なんかそれよく聞かれるな。俺の家にあったんだよ。昔の約束がなんか関係してるって」

「…比企谷、俺も鍵穴は違うけどおんなじの持ってるんだよ」

「…は？」

「ほら」

「…そっくりだな。偶然じゃないのか？」

「いや、こんな変わったものそう偶然で同じものがあるとは思えない」

「ってことは俺と一条は昔から会ってたってことか？」

「そ、そうなるな」

「こりゃまたすごいね」

「ちなみに一条はなにか覚えてるのか？」

「いや、誰か女の子と約束したってことしか」

「そうか。俺なんて約束のことも忘れてたからまだいい方だな」

「そ、そんなことより！……ますます謎が深まる。なんで同じものが……」

「俺もそれは思うが今考えても仕方ないだろ？とりあえず帰ろうぜ」

「あ、ああ」

一体どういうことだ？今は考えても仕方ないか。

続く

7話

最初は小咲サイド

「で、デートに誘う!？」

現在私はまたるりちゃんと作戦会議をしています。

「ええ。比企谷くん、自分からは絶対誘わないと思うし」

「い、いやでも私まだ一条くんか比企谷くんどっちが好きかわかんないし…」

「小咲はそうかもしれないけど、最近のあんた、比企谷くんのことばっか見てるわよ?」

「ええっ!?!…ま、まさかバレたりしてないかな」

「気づいてないんじゃない? 比企谷くん、昔のことは覚えてないみたいだし昔の絆は今じゃないんだから積極的にいいかないと」

「で、でも思い出してくれるかも…!」

「どうやって？」

「……わかんない」

「ま、過去の事言ってもしょうがないし、とにかくデートに誘いなさい。最初は断りそうだけど来てくれるわよ」

「う、うん……」

さ、誘えるかな……

side out

教室

「ひ、比企谷くん！」

「ん？なんだ小野寺」

「そ、その……あ、明日デートしない？」

かみかみ
！

……は？

「……は？」

心の声とかぶっちゃったよ。今なんて言ったこの子？

「で、デートだよ！……だ、ダメかな？」

「……頭でもうったか？」

「なんで!？」

「ほら比企谷くん、小咲が誘ってるじゃない」

え、そんなこと言われても……周りの殺気凄いし。断れオーラがすごい。一条なんて顔面蒼白だし。

「すまん。俺明日は用事が……」

「あるわけないわよね？さっき聞いた時暇って言ってたんだから」

「……」

そう言えばさっき宮本に暇って言ったんだ。いきなり明日の予定聞いてくるからおかしいと思ったんだよ！……というかもう小野寺が顔真っ赤にして涙目になってるから断るにも断れんしな……

「……はあ。わかったよ。行けばいいいんだろ」

「ほ、ほんと!?じゃ、じゃあ時間とかはメールするね?……そういえば連絡先知らないや。ついでに交換しよ?」

「お、おう」

なんかその後も一条やら色々交換して連絡先が増えました。

そしてデート当日

「お待たせ!比企谷くん!」

「おう。今来たばかりだから気にすんな」

このセリフ1回言ってみたかった!

「そう?ならよかった」

「…それと…ふ、服にあってるぞ」

「あ、ありがとう……」

『……』

ほらー!やっぱり黙っちゃった!あれはイケメンだけの特権なんだよ!

「じゃあ行くか」

「うん」

今日はショッピングするらしい。女子と来ればいいのに。

「これどうかな？」

「いいと思うぞ」

「じゃあこっちは？」

「あーうん、いいぞ」

「それともこっち？」

「おーそれもいいな」

「……比企谷くん聞いてないし見てないのになんで良いってわかるのかな？」

「す、すみません……で、でも俺のセンスで判断してもろくなことになるぞ？俺
センスないし」

「大丈夫、私は比企谷くんを選んでほしいから」ハハ

……そういうセリフや笑顔が勘違い男子を生むんですよ。

「……じゃあ、右、かな」

「わかった！じゃあこれにするね！」

「ほんとにいいのか？」

「いいの！」

「比企谷くん何食べる？」

「じゃあこのカルボナーラでいいや」

「あーそれも美味しそうだね！私はこのナポリタンにしようかな」

「おっ、なかなかいける」

「でしょ？ここのお店美味しいんだ！このナポリタンも美味しいよ？食べる？」

「い、いや別に……」

「はい、あーん」

「な、何をしてるんですかこの子!？」

「お、おい小野寺？」

「ん？……！わ、わわ私何を!？」

「じ、自分で食べるから大丈夫だぞ」

「あ、う、うん……」

なんか惜しいことをした気がする。

「比企谷くん、今日は楽しかった?」

「……まあつまらなくはなかったぞ」

「ふふっ、それなら良かった……ちょっと寄りたいたいところあるんだけどいい?」

「ああ」

「この道を抜けるとね……」

「……へえ、こんな場所が……」

小野寺についていくと凄く景色のいい場所についた。丁度夕陽が落ちる時間帯なので眺めも絶景だ。……この景色どこかで見たことあるような……

「ここ、私しか知らないんだ」

「そんな場所教えてよかったのか?」

「うん!二人だけの秘密だよ?ハチくん」

ドクン

……三お、思い出した……

「な、なあ小野寺……俺達って1回あったことあるか?小学生の時とか」

「うん… あるよ」

「…全部思い出した。…寺ちゃん、だよな？」

「!!うん！ やっと思ひ出してくれた！ハチくん！」

「どわっ！ お、小野寺いきなり抱きつくな！」

「ご、ごめん…」

「…でもまさかあの寺ちゃんだったとは…」

「私ハチくんが転校してきた時すぐに気づいたのにハチくん気づいてないんだもん」

「す、すまん」

「…それと昔私の前からいなくなったのつていじめをなくすためなんだよね？」

「…あ、ああ。勘違いじゃなければそれなりに仲いいと思ってたからな。転校の

こと伝えたらきつと止めると思っ

「…そっか。寂しかったんだよ？」

「すまん…」

「…でもこうしてまた再会できたしいいかな！」

「…あのさ、もしかしてこれからハチくんって呼ぶのか？」

「え？うん」

「今のまま苗字で呼んでくれないか？」

「……どうして？」

「いや、ちょっと色々とめんどくなりそうだからさ」

一条とか一条とか一条とか。

「……よくわかんないけど、わかった。それにいきなり呼び方変えるのもなんか恥ずかしいしね。あらためてよろしくね！比企谷くん！」

「……おう。よろしくな小野寺」

こうして俺たちは本当の再会を果たした。

続く

8 話

小野寺とのデー：ショッピングから数日後、またうちの学校に転校生が来た。名前は鷗誠士郎。なんでも桐崎のボディガードらしい。そして名前と男子制服を着ているということもあり、最初は男かと思ったが実は女だった。なんか一条と桐崎の関係を疑ってここに転校してきたらしい。まためんどくさいことになりそうだ。

そしてさらに数日後、今日から俺達は林間学校に行く。

俺にとっては苦痛でしかないな。

「楽しみだね、比企谷くん」

今はバスに乗っているのだが、何故か隣は小野寺。一条と隣になればいいじゃん。寝ようと思ったのに。

「まあそうだな」

「私昨日楽しみで全然寝られなかったんだ」

「だからか？お前目の下にくまあるぞ？」

「え？ほんとに？」

「今日は絶対疲れるだろうし今のうちに寝といた方がいいぞ。ついたら起こしてやるから」

「……うん、わかった」

そういうと小野寺は俺の肩に頭を乗せてきた……は？

「ちよ、小野寺なにやってんの？」

「え？……だ、ダメだった？」

「い、いやダメじゃねえけど……」

いやですね？ただでさえ席隣で近くて女の子の香りとか色々あって緊張してるのに。

「~~マ~~……」

……もう寝てるし。まあでも俺も珍しく昨日はあまり眠れなかったんだよな……少し寝るか。

「舞子、今からちよっと寝るからついたら起こしてくれ」

「ん？おっけー！」

「はちまーん」

「ん……ついたのか？」

「ああ。それより感謝してくれよ？寝てる時も2人で寄り添って寝てる感じだったし。今の二人の状況で小野寺先に起きてたら……」

俺は二人の状況を見してみる。……なんで俺小野寺と手繋いでんの？

っていうかやわらかい！なんでこんなに柔らかいの!!

「っ……すまん。恩に着る」

「いいってことよー！」

危ない危ない。危うく小野寺に怒られるところだった。

「小野寺、起きろ」

「んっ……」

起きない……

「おーい」

「あっ……」

……ちよつとまって。なんで起こしてるだけでこんなエロい声出すんだよ。男子高校生には刺激が強いからやめて！

「おい小野寺」

「んん……あれ？ついたの？」

「ああ。もうみんな外出てるぞ」

「じゃ、じゃあはやくでないと！」

「よし、それじゃあ女子は薪をとってきてくれ！料理できるやつは俺と食材の準備だ！」

今からカレーを作るのだが一条が急に仕切り出した。なんか目が燃えてる。俺は適当に野菜切るか。ここで俺の料理スキルを見せてやろう。

……俺なんて……一条うますぎだろ。聞いたら家の人達の分全員作ってるらしい。勝てませんねこれは。

「な、なあ比企谷！」

「どうしたんだよ、慌てて」

「さ、さっきまたまた見ちまったんだが桐崎のやつ、鍵持ってたんだよ！」

「…いや、鍵なんて持っても別に不思議はないだろ」

「このペンダントだよ！明らかに家の鍵とは違った。桐崎が持ってたのはこのペンダントの鍵なんじゃないか？」

「…さあな。俺に聞かれてもわからん。とりあえず今はカレー作ろうぜ」

「え？ああそうだな」

そして俺達は今日泊まる予定の旅館に来た。

「結構豪華だな」

部屋はなかなか綺麗だった。それより、なんで男女合同の部屋なんだよ。いや仕切りはあるけどさ。まあ女子が小野寺たちだからいいけど。

「うちの学校こういうところは気前いいからね」

「どうする？時間あるけど」

「ふっふっふ…そういうこともあると思って、トランプを持ってきました！これで遊ぼうぜ？まあ普通にトランプするのもあれだから、負けた人は罰ゲームはどう？」

「内容は？」

「いい質問だねるりちゃん！負けた人は自分のスリーサイ：ぐふっ！」

「OKがでるとでも？」

「じゃ、じゃあ今日の下着のい：ぐふう！」

「ま、い、こ、く、ん？」

「：なら初恋のエピソードを語るとか：」

「まあそれなら」

ふあっ!?!なんだと!?!俺の恋愛ごとなんて黒歴史ただぞ!?!

：これは負けるわけにはいかん。

続く

9 話

ということが始まりました、ババ抜き。

少し雲行きが怪しくなってきた。鶯、宮本、舞子が先に上がり残りは俺、小野寺、一条、桐崎の4人。

そして俺の番なのだが…

「…」ハッ

…こっちか？

「…」ズー

…やっぱりこっち…

「…」ハッ

無理！俺が引く相手は小野寺なのだが、明らかに顔でわかつちゃう！

俺はあと一組揃えば上がりだ。小野寺の持っている二枚のカードのどちらかがもしかしたら当たりかもしれない。でも小野寺の顔でもうジョーカー持ってるのわかつちゃうんだよな。というかも色々表情が変わってもうなんか可愛い。こんな

こと絶対言わんけど。

… まあまだ4人だし。

「…」ズッ

俺は小野寺の可愛さに負けてジョーカーをひきました。

だが、これで小野寺が上がったことで俺は手加減しなくてすむ。

ここからは俺のターン。

「…」

「比企谷、これジョーカーか？」

「さあ」

「こっちか？」

「ふーん」

「くっ… これだろ？」

「ほお」

「だあー！わからん！比企谷、ポーカーフェイスうますぎだろ！」

ふはは！これが俺の実力だ！

「これだ！……」ズー

ぷっ、一条のやつジョーカーひいてやんの！これで俺はあと1枚。

「これかな……おっあがり」

「これで残りは楽と桐崎さんだね」

ふう危ない危ない。

結局桐崎が負けたんだが運のいいことに入浴時間になり罰ゲームは消滅した。

久しぶりだな、温泉なんて。

「……ん？ 一条先入ってたのか」

「おう、比企谷か。集達もうすぐくるぞ」

「ふう……いい湯だ」

「比企谷、おっさんみたいだぞ」

「こういう時くらい別にリラックスしてもいいだろ」

俺達が雑談していると、誰が入ってきた。

「おっ、集か？」

「ここ意外と広いのね！」

「ほんとだね！私温泉はいるの初めてだから楽しみだったの！」

「小咲ちゃんも？私もなのよ！」

……この声って……

「はやく洗ってお湯に……」

「？どうしたの？千棘ちゃん……」

……目の前にいたのは小野寺と桐崎だった。……どゆこと？

「な、な、な……」

「なんであんたらいるのよ!? ってかこっち見んな！」

「す、すまん！っていうかここ男湯だぞ!？」

「はぁ!? ここは女湯よ！」

「なに!? 俺ちゃんと確認したぞ！」

「……わかった、きつとクロードの仕業だわ」

「……確かにあいつならやりかねんな」

……クロードって誰？俺と小野寺置いてかれてるんだけど。

「とにかく、あんたら早く出なさい！バレたらただじゃすまないわよ？とくに鶴とか」

「あ、ああ。すまん桐崎！小野寺！いくぞ比企谷！」

「え？あ、おう……」

カチカチ

「おーいい景色だな」

「ほんとですね」

……まずい。ほかの女子まで入ってきた。

「げっ、みんな来ちゃった！小咲ちゃん！こいつら隠すわよ！」

「う、うん！」

……どうしよう。見つかってしまうかという不安もあるけど、小野寺との距離が近くてもう心臓バクバク。タオルまいてるだけだから……

時々生足とか当たってるんだよ。……女子ってなんでこんな肌白いんだ？

「……ひ、比企谷くん、あんまり見られると恥ずかしいよ……」

「す、すすすまん」

「…出る気配ないわね。あんた達、私たちがサポートするからなんとか逃げ出さない」

「なんとかって…」

とにかく探すしかない。…ん？あれは！

「おい、あそこに穴あるぞ。男湯に繋がってるんじゃないか？」

「ほんとだ！いこう！」

「あそこね。いくわよ小咲ちゃん」

「う、うん」

バレないように、そっと…

「ん？小咲達そんなところにいたの？」

「る、るりちゃん」

「なんでそんな隅にいるのよ」

「えっ!? な、なんとなくだよ、あはは…」

「お嬢！お嬢もそんなところにいないでこちらへ！」

「ちょ、きちゃだめ！」

ま、まずいぞこれは。

「あんた達先行きなさい！ここは私たちがあしどめするから！」ギョギョ

「わ、わかった！」ギョギョ

というかこれ息がやばい。早くしないと……

「そうそう！今恋愛トークしてたんだけど、桐崎さんとか一条くんとううなの？」

「え？ふ、普通よ普通！」

「えー？気になるなあ」

「ほ、ほんとになんでもない…わっ」

ンギン

うおっ、桐崎のやつこけやがった。一条のやつ大丈夫か？というか早くどけ！

息が！

（比企谷！こっちだ！）

（おう！）

「えー？じゃあじゃあ寺ちゃんは!?好きな人いないの？」

「わ、私!?私はいないよ？」

「寺ちゃんも怪しいなー」

「そういえば前気になる人いるって…」

「る、るりちゃん!？」

「ほーほー、これは詳しく…」

「……」

「あー！逃げるなー！」

「い、いないってばー！ってわっ!？」
ツル

ンギン !!

うわ!?!また誰か転んで…

チエッ

「!？」

「っ!？」

「それで、見たの？」

「み、見てないぞ？湯気でほとんど。な、なあ？比企谷」

「え？あ、おう」

「じゃ、じゃあダーリン、最後のは？」

「最後のってなんだよ？」

っ、最後の…俺が穴を通る寸前に口に來た感触って…

「…ならいい」

「お、小野寺もごめんな！」

「えっ!?だ、大丈夫だよ!き、気にしてないから!」

「ほら、比企谷も!」

「え？あ、お、おう。すまなかった」

「き、ききき気にしないで!私ももういくね!」

… 小野寺のあの反応。… やっぱりあの時… き、キスしちゃったのか？

小野寺と。あの顔は小野寺もわかってるよな。… どう思われてるんだろうか。

嫌われなきゃいいけど。

翌日

「お、おはよう比企谷くん」

「ん？ あ、お、おう」

これは嫌われるとかそういう問題じゃないわ。俺がまともに話せない。

というかなんか一条と桐崎の様子もおかしいな。…まさか桐崎が転んだ時に俺と同じことが？ まあそれはないか。

というかどうかしよう。小野寺とまともにこれから話せるかな。

続く

10 話

そして時間もすぎ、肝試しの時間となった。

ちなみにこの肝試しは男女ペアで、決め方はくじ引きである。

まあつまり、運が良ければカップル誕生、なんてこともあるのかもしれない。リア充爆ぜろ。

「楽、もし小野寺のと同じ番号当たったら欲しいか？」

「……五百円で買おう」

「おっけー！」

俺は誰とペアになるのだろうか。なるべく知ってる人が……ってそれ4人しかないわ。……でもちよっと小野寺と一緒に今は恥ずかしくて無理。会話もまともにできないから。

「よし！いってくる！」

「頑張れー」

まあここだけ是一条が小野寺とペアになることを祈ってやろう。

俺って超優しい。

「……」

「どうだった？ 楽」

「…… 桐崎とだった」

「おっ、すごいねー。やっぱり相性いいんじゃない？」

「だ、誰があんなやつと！」

「ま、もし俺が当たってもそのペアをかえちゃうと誠士郎ちゃんあたりに怪しまれるかもしれないしかえるのは無理だね」

「くっ……」

「ま、桐崎さんならいいじゃない！ あわよくばイチヤコラできるし」

「するわけないだろ！」

「あはは！ ん？ 次八幡だぞ？」

「え？ おう。いつてくる」

「おー、八幡運いいな。小野寺となんて」

…マジデ？

「……！」ふん

…今小野寺の方見たら顔そらされたし……はあ。

結局ペアは一条と桐崎、舞子と宮本、鵜はなんか女子と同じになったらしい。どゆこと？そして俺は小野寺と。

『……』

うん。非常に気まずい。本当は肝試し中は手を繋ぐんだが、みんな見えなくなったら恥ずかしくてすぐ手放したし。あんなことあったあとにまともに話せるわけないだろ！……これ絶対怒ってるよな。遅いかもしれないけどやっぱり謝ろう。

「…な、なあ小野寺」

「な、なに!？」

「……すまなかった!」

「……え？」

「その… 昨日の温泉で… 事故とはいえ、小野寺と… き、キスを…」

「……」 カッ

ほらー！ また顔赤くなって怒ってるよ。許してもらえるのだろうか？

「… 本当にすまなかった。許してほしい」

「… じゃあ一つだけ質問に答えて？」

「ああ。なんでも答える」

「その… 比企谷くんは私として… そのい、嫌だった？」

え？ 何その質問。これの答えで許されるかどうか決まるよな。

どっちを答えればいいんだ？ …… うーん、わからん。自分の正直な気持ちをいうしかない。

「… ま、まあ嫌ではなかったぞ」

「ほ、ほんとに？」

「ん？ あ、ああ」

「… そっか。… 比企谷くん、私も嫌じゃなかったよ？」

… は？

「そ、それってどういう…」

「さ、早く先進もう！」ギョッ

「あ、おい！」

「…♪」

…まあなんか小野寺の機嫌良くなったっぽいさっきの答えで良かったのか？

「おつ、八幡たちもかえってきた！」

「？小咲、あんた何かいいことでもあったの？」

「ん？ううん、別に？」

「くっ、比企谷羨ましいぞ！」

「お前の運がなかったただけだろ」

「くそ…千棘のやつ、怖がりらしくてよ。進むの大変だったぜ」

「なっ！し、仕方ないでしょ！怖いもんは怖いんだから！楽だって時々びびってたじゃない！」

「お前ら名前呼びになったのか？」

「え？あ、おう。前よ付き合ってるのに名前呼びじゃないのかって言われてさ。だからいい機会だしかえるかってなって。そうだ。比企谷とも名前呼びにしようぜ！集だって名前で呼んでるんだし！いいだろ？八幡」

「俺もそろそろ名前で呼んでくれると嬉しいかな」

「……はあ。わかったよ。楽、集」

『おう！』

俺なんかがこんなリア充みたいな生活を送っていいのだろうか？

なんか後から嫌なこと起きそうな予感がある。

「比企谷くん、早くバスに乘ろう？」

「ああ」

……まあでも今回くらいはいい、かな。

続く

11 話

「みなさん、集まっていたいたいたのは、今週の日曜日は千棘お嬢様の誕生日なんです。それで誕生会を開くのですが、小野寺様たちも招待したいと思ひまして」

突然、鵜から集められ、告げられた。桐崎って今週だったのか。

「なあ、集のやつはいいのか？」

「なんのことでしょう？」

「……」

存在すら消されてるよ。

「じゃあプレゼント用意しなきゃ！るりちゃん前日の土曜日一緒に買いに行こうよ！」

「あ、ごめーん。私もう誕生日プレゼント用意してあるから、比企谷くん行ってきて」

「え!?るりちゃん、千棘ちゃんの誕生日知らないはずじゃあ…」

「いいからいいけ」

「いたっ!?…ひ、比企谷くん、いいかな?」

「ああ。いいぞ。俺も用意してないし。それに俺のセンスじゃ変なものになるからな。小野寺選んでくれ」

「ダメだよ!ちゃんと自分で選ばなきゃ!千棘ちゃんきつと喜んでくれるよ」

「わかったよ」

そして、誕生会前日。

俺と小野寺は今電車に乗っている。

「なあ、近くのショッピングモールじゃダメだったのか?」

「前新しくオープンしたから行ってみたくて…ごめんね?嫌だった?」

「いや、別にいいけど…」

土曜だから人が多いな。まだ数駅着くまであるし…

その時、電車が揺れた。

「おわっ」

「きゃっ」

「…すまん大丈夫か？」

「う、うん」

というかこの状態恥ずかしいんだけど。人多いので小野寺に角に行ってもらったんだが、今はその小野寺をいわゆる壁ドンしている状態だ。距離も近い。

「また人入ってきたな。小野寺つめるぞ」

「う、うん」

小野寺との距離がさらに近くなる。あと数センチ詰めれば触れてしまいそうな距離だ。

駅を通過する事にどんどん人が増えてくる。

「ぐっ…」

人多すぎだろ！もう小野寺と密着してるし！小野寺顔赤くしちゃってるし。

「す、すまん」

「だ、大丈夫だよ」

いや、そうは言うけど顔赤いじゃん。俺も赤いだろうけど。

その時、また電車が揺れた。

「おっと」

「んっ…」

「す、すすすまん！」

まずい。今の揺れで俺の足が小野寺の足と足の間にある。小野寺の方が小さいので、当然俺の足の方が長い。つまり膝が曲がってる状態なんだが…

「んっ… ひ、比企谷くん… 足どけて…」

いやこれはまじでやばい！小野寺のスカートの中に膝が当たっているから… この先は言えん。

「そ、そんなこと言われても… 人多すぎて」

「あっ… んっ！」

こ、これはエロい。俺今小野寺と密着状態なのでもう耳元で囁かれてるようなもんだ。収まってくれ！俺の息子よ！

ギュッ

「お、小野寺!？」

小野寺が抱きしめてきた。柔らかいのが当たってるから！

「あ、足…ゆらしちゃだめえ…」

「ご、ごごごめん！すぐどけるから！」

さすがに俺もやばいので足を頑張ってどけようとする。

「んっ…う、動かさないでえ…」

だめだ！動かしたら余計にだめだ！早くついてくれ！俺の理性が！

「ふふふ … やつとついた。小野寺大丈夫か？」

「う、うん大丈夫…」

「…とりあえず行くか」

その後、俺たちはすぐにプレゼントが決まり帰路についた。

正直、プレゼント買いに来たというよりは遊びに来たようなものだった。プレゼント決まったあとゲームセンターとかいったし。

「喜んでくれるといいね！」

「ああ」

そして、桐崎の家

「ようこそ、みなさん」

「おおきいねえ……」

「!?」

桐崎はすごく驚いた顔をしている。そういやこのメンツ…ギャングか何かか？

「千棘ちゃんお金持ちだったんだね！」

「え？う、うん。まあ」

その後俺達はプレゼントを渡した。楽のやつがなんか桐崎に似たゴリラのような人形を渡していて笑いそうになった。俺よりセンスないだらあいつ。

そしていまはパーティを楽しんでいる。

「ふう…ちょっと休憩…ん？」

外で桐崎と一条がなにか話している。

「ザクシャインラブって知ってる？」

… ん？なんの話だ？

「な……そ……を」

聞こえづらいな。ん？今度は一条がペンダントを取り出した。

…… は？桐崎のやつなんで鍵を…

ポキッ

あ、折れてる。

…… どういうことだ？桐崎も鍵を持っていた。小野寺と似たような鍵を。つまり、一条、俺、桐崎、小野寺は昔あっていたということになる。……二組のペアができるってことか？じゃあ俺の持っているペンダントも小野寺か桐崎のどっちかの鍵と当てはまるということになる。

…… うーん、気になる。

続く

12話

桐崎の誕生会が終わり、数日後、なんとまた転校生がやってきた。

転校生のバーゲンセールだな（白目）。

名前は橘万里花。楽の幼なじみで十年前に約束した女の子のうちの1人らしい。つまり俺とも面識があるわけで、橘は俺のことも覚えていた。まあ俺は覚えていないんだけど。名前でいきなり呼ぶのはやめていただきたい。心臓に悪いから。ちなみに橘は楽にぞっこんだ。

いつもベタベタしてる。爆ぜろ。さらには許嫁らしい。もうまじで爆ぜろ。

「おーい、楽、八幡！修学旅行の写真集出来上がったらしいから見に行こうぜ！」
「おう！」

修学旅行ねえ……なにもなかった。うん。なにも。

「意外と量あるな」

「困るな～なるべくたくさん欲しいよね」

「まあな」

「あ、小咲くこれなんてどう？」

そこにあったのは俺と小野寺が手を繋いでる写真だった。しかも結構アップで撮られてる。いつとられたんだよ。

「な、なかなかいい写真ないね！」

「いや、これは？…せっかくだし買うか」

「え!?…じゃ、じゃあ私も買おうかな」

よく考えたらこれ結構恥ずかしい。

「その旦那」

「んだよ集」

「うちの商品見てってくださいよう。ここでしか手に入らない写真だよ！俺が求めるのは女の子のちょっぴり恥ずかしいショットのみ！ほら楽と八幡も」

「一体なんの…」

「……」

これは。小野寺の寝顔写真。というか俺と一緒に寝てた時のだし。あ、語弊をう

むね今の言い方。……買おうかな。

「ちなみに1枚500円だよ」

「買おう」

「俺も」

「毎度あり」

集のやつ一体どこであんな写真とってたのやら……ん？これって……

「ぶっ!？」

ちょっと待て。この桐崎が写ってる後ろにいるの小野寺じゃねえか!?!しかも着替え中だし!?!だめでしょこれ!

「……先生のところ持っていくか」

「あれ？比企谷くん？まだ決まっていなかったの？」

「げっ、小野寺」

「？何隠したの？」

「い、いや何も隠してないぞ？」

これはバレたらまずい。男子に下着姿見られるなんて嫌だろうからな。

「え？でも今……」

「ほ、ほんとになんでもないぞ？うん。俺ちよつと職員室いくから！」

「あ……今の写真……千棘ちゃん？」

数日後

「一条くん」

「ん？どうしたんだ小野寺？」

「実はうちの店のアルバイトの人が休んじゃって、今人手不足なの。一条くん前料理上手っていったよね？それでもしよかったら明日だけ手伝ってほしいんだけど……」

「おう！いいぜ！……って、あーすまん。俺明日用事あるんだ」

「そっか……困ったな」

「そういや八幡前家で家事してるとかいってたよな？」

「え？いやでも俺一条ほどじゃないぞ？そんな何10人分も飯作らんし」

「比企谷くん、お菓子とか作ったことある？」

「まあ時々な。妹が食べたいって言った時は」

「……うん。比企谷くん、お願いします！」

「えゝ……」

「少し手伝ってくれるだけでもいいの！」

「……わかったよ」

「ほんとっ!?!ありがとう！」

……素人に和菓子屋のアルバイトなんて務まるのだろうか。
続く

13 話

ということ、今日は和菓子屋オノデラでバイトの日だ。

めんどくさいなあ……まあ歩いて数分だから遠くはないんだけどさ。

……よし、いくか。

「……すみませーん……今日バイトで来た……」

「なんとか間に合わせなさい！わかった!?……ったく……ん？なに坊や？何か用？」

「え、えっと……今日小野寺さんに頼まれてバイトに来たんですけど……」

「バイトお？そんなの頼んでないけど……訳わかんないこと言っでないで坊やはうちに帰ってミルクでも飲んでな」

……ええー……何この人。ってここ小野寺の家なんだから小野寺さんじゃ皆そう
だもんな。

「えっと、こ、小咲さんに頼まれて……」

「小咲？あんたみたいなズンビくんが小咲と知り合いとは思えないんだけど……」

人は見た目で判断しちゃいけないんだぞ！

「お、お母さんストーップ!!」

「あら、小咲。あんたこのゾンビくんと知り合い？」

「お、お母さん失礼だよ！比企谷くんは私が手伝ってもらえるように頼んだの！」

「この子が？……料理できるの？」

「一般的なことなら……和菓子は作ったことありませんけど」

「……はあ、まあ今は緊急だし、比企谷くんだったけ？どのくらいの腕かみたいから簡単なもの作ってもらおうわ」

「え？は、はい」

「が、頑張って！比企谷くん！」

……何作ればいいんだよ……とりあえず昨日勉強した饅頭作るか。

「……え、えっと、できました」

「……」

小野寺母は値踏みをするように饅頭を見つめている。

そして、口に運んだ。

「……ほおー、これは……比企谷くん、下の名前は？」

「は？……八幡ですけど」

「八幡くんね。あんた小咲のお婿になりなさい」

「ぶっ!？」

「は？」

「お、お母さん！な、何言ってるの！」

「いやあ、初めてでこれだけでできれば十分だわ。もしかしたら春並にうまいかも」
春？誰だ？どつかで聞いたことあるような気が……

「ま、とりあえず今日はなんとかなるわね。私は裏でやることあるから小咲、餡の作り方教えてあげな」

「う、うん！じゃあやろう！比企谷くん！」

「ここはこうするんだよ」

「なるほど……小野寺は作ったりはしないのか？」

「うん、このくらい簡単なのならできるんだけど、最初から最後までやるとなんか失敗しちゃうんだ」

「へ、へえ……」

「だから代わりに私は…ほら！」

「ほお…こりゃうまいな。飾り付けだけでここまでなるのか。まるで芸術作品だな」

「えへへ、そうかな？私これだけは得意なんだ」

「これだけでできれば十分だろ。いくら料理まずくてもこれならみんな買うわ」

「ほ、褒めすぎだよ。じゃあそろそろ本番行こっか。…これを選んで…よっと」

「俺持つぞ」

「大丈夫大丈夫…きゃっ!？」

「っ！」

俺は小野寺が転びそうなところでなんとか後ろから支えた。

「大丈夫か？」

「う、うん、ありがとう」

「小咲…あらあら、いつの間にそんな仲良く…」

「お、お母さん？…っ！」

「す、すまん！」

「やっぱり八幡くん小咲のお婿に…」

「お母さん!!」

「うふふ。小咲、そろそろ店番お願い」

「わ、わかった!」

「八幡くんもね」

「え? 俺も?」

「いらっしゃいませ!」

「いらっしゃいませ…」

「ほら、もっと笑顔で!」

「い、いらっしゃいませ」

「…」

「おい、明らかに引くんじゃない」

「あ、あはは…」

「八幡くん、これかけて」

「? 眼鏡?」

「その目、特徴的だからね。怖がっちゃうお客さんもあるかもしれないから」

「はぁ……」

「おおっ！これは……小咲似合ってるわよね？」

「……」

「小野寺？」

「へ？あ、う、うん！すごく似合ってるよ！」

「さ、さんきゅ」

「小咲、今見惚れてたでしょ」

「っ！み、見惚れてないから！」

「うふふ、これは今後に期待ね。あ、あと私これからちょっと外でなきゃいけないから店番よろしくね。小咲、2人きりの今がアピールチャンスだよ」

「も、もう！早くいって！」

「はいはい」

……結局にあってるんだよね？

「いらっしゃいませ！」

「お、今日は小咲ちゃんが店番かね」

「あ、田中さん」

「小咲ちゃん、今度わしとデートでもいかなかな？」

「あはは、私じゃもったいないですよ」

「いやいや、小咲ちゃんすごい美人じゃよ？……あー、もう彼氏さんがおったか」

「へ？……は、ハチくんはそういうのじゃ！」

「ええのう、青春じゃのう。彼氏さんや、小咲ちゃんみたいな美人さんそういないからしっかり捕まえとくんじゃぞ」

「い、いや小野寺と付き合ってるわけでは……」

「今日は小咲ちゃんのためにいつもより多めに買おうかの！」

「ありがとうございます」

「あのじいさん、1人で勝手に納得して帰ったな」

「あ、あはは……で、でもこうして2人で働いてると夫婦みたいだね」

「ぶっ!? お、小野寺!」

「ん？……っ!? わ、私今な、なにを!? わ、忘れて! 今の!」

「あ、ああ……」

……小野寺と夫婦ね……悪くないな。まあそんなこと有り得ないけど。

「そろそろお店しめよっか」

「おう」

「今日はありがとね」

「別にいいぞ。これくらいだったら……うわ、すげえ雨降ってる…」

「え？…ほんとだね。あ、電話……お母さん？うん……ええ！？う、うん。わかった」

「なんだって？」

「お、お母さんこの雨で帰ってこれないって。……それで比企谷くんには泊まってもらえて」

「……は？」

続く

14 話

「…えっとすまん、もう一回言ってもらってもいいか？」

「だ、だからこの雨だから泊めてあげなさいって…」

…うん、ごめん。二回言ってもらっても意味わからん。

「いやいや、まずいだろ」

「で、でもこの雨だし…」

「いや、さっき見た程度なら頑張れば帰れ…」

ギョギョギョ !!ゴッゴッ …

「……やっぱり泊めてもらっていいか」

「う、うん！とりあえずお店片付けよっか！」

「おう」

…え？まじで泊まるのこれ？俺と小野寺ふたりっきりで？

…まあ俺に狼になる勇気なんてないけどね。小野寺は嫌じゃないのか？

「よし、終わり！えっと、じゃあこれからどうしょっか？まず私の部屋に上がってもらって…」

「…え？いいのか小野寺の部屋で」

「……うー！う、うん！でもちょっと待ってて！片付けるから！」

ガザガザ !!

めっちゃ片付けてるよ。別にリビングとかで良かったのに。

「い、いいよ！」

『……』

小野寺の部屋に入ってからというものの、ずっと沈黙が続いている。

いや、こういう時って何話せばいいわけ？なんか小野寺も俯いちゃってるし……

「あー、やっぱり帰ろうか？男と2人きりなんて嫌だろ？」

「え？ううん！比企谷くんなら大丈夫だよ」

……なんかそれはそれで男として見られてないような気が。

「そうか？でもこれからどうするんだ？」

「んー、あ！アルバムでも見る？」

「それなら少しは話の種になるな」

「この頃るりちゃんと仲良くなったんだ」

「へえ、長い付き合いなんだな。俺はずっとぼっちだったわ」

「…私は？」

「え？あ、ああ。小野寺はと、友達だぞ？引越してからぼっちってことだよ」

「友達とか作ろうとは思わなかったの？転校生って最初は注目されるでしょ？」

「最初だけな。でもすぐに静かになる。まあ別に不便なこともないしなかったしな」

「そっか…あ！そういうえば小学校の頃のアルバムもあるんだ！…えっと、あった。これ」

「いや、俺写ってないだろ…」

「そう思うでしょ？でもね…ほら」

そこには小野寺と2人で写っている写真があった。

「こんな写真いつとったんだ？」

「分からないけど、よく撮れてるよね」

「ほんとだな。この俺はあんま目腐ってないわ」

「ふふっ、そうかも。……ねえ、比企谷くん」

「？なんだよ？」

「……2人きりの時は昔の呼び方じゃだめかな？」

「い、いや昔の呼び方ってなんか小さい子に言ってるみたいで恥ずかしいし……」

「でもなんか比企谷くんって呼んでるとなんだか距離が遠くなっちゃった感じがして……」

「……八幡ならいいぞ」

「え？」

「名前だよ。ハチくんだとなんか幼いからそのまま名前にしてくれ」

「……うん！わかった！八幡くん！」

女子に名前で呼ばれるのってなんか恥ずかしいよね。俺だけか。

「あ、あと私のことも2人きりの時でいいから名前で呼んでほしいな」

「いやそれは……」

「……お願い」

「うっ……こ、小咲」

「っ……や、やっぱり恥ずかしいね」

「俺の方が恥ずかしいわ」

「あはは……あれ？……雨やんでる」

「……ん？ほんとだな。やっぱり帰るよ。妹も心配だしな」

「うん」

「じゃあまたな、小野寺」

「……名前」

「あ……またな、小咲」

「うん！……八幡くん、ちょっと横向いて？」

「え？ああ」

チヨッ

「おやすみなさいっ、八幡くんっ」

……はえ？俺今何された？……俺今日眠れんかも。

その頃小野寺は

「うっ！わ、私今は、八幡くんにき、ききキスしちゃったー！！！！
学校で顔合わせられないよお！」

続く

15 話

はぁ… 小野寺の昨日あんなことあったから顔合わせられんな。

どうしたもんか。

俺は重い足取りで下駄箱へ向かった。

「…ん？紙切れ？」

靴箱を覗くと、1枚の紙が入っていた。…も、もしやこれはラブレター!? っ
てそんなわけないか。とりあえず中身は… 小野寺小咲に近づくな? あー… イタ
ズラかなにかか。小野寺人気あるしな。ほかの仕掛けは… してないみたいだな。
とりあえず様子見るか。

「あつ、おはようはち… 比企谷くん!」

ちよつと今名前いいかけましたよね! やっぱり名前呼び許可しない方が良かったかな…

「うっす、こさ… 小野寺」

俺も間違えそうになったよ。ほかのヤツらは気づいてないみたいだな。

「……」

いや宮本がめっちゃこっち見てる……あ、違う方向いた。

「おっ、はっちまーん！ 楽がよー！」

「あああ！ 言いふらすな集！」

そしてこいつらはいつもうるさいな。落ち着きを持ってほしい。落ち着きを。とりあえず席につくか。靴箱は紙切れだけだったが机は……何もし。

ただのいたずらか？

帰り

結局今日は特に何も無かった。気にする必要もなかったか？

「……いって……画鋏」

帰ろうとして靴を履き替えようとすると、靴の中に画鋏が散らばっていた。そしてまた紙切れも。

……小野寺小咲に近づくな。またか。こりゃあ日に日にエスカレートしていくパターンかもな……やはり俺が誰かと仲良くなるのは無理だったようだ。あいつらとの関係もゼロに戻した方がいいな。危害があいつらに及ぶ可能性もある。

翌日

「おはよう比企谷くん！」

「……」

「あれ？比企谷くん？」

「……」

「ちょっと比企谷くん、小咲が挨拶してるじゃない。返したらどうなの？」

「……おはよう。あと、もう俺には関わるな。小野寺だけじゃない。宮本も、一条も、舞子もだ」

「……え……」

「お、おい八幡それどういう意味……」

俺は一条の言葉を無視して席に座る。

「授業始めるぞー席につけー」

いいタイミングだ。これでおつけー。あとは授業終わったらすぐ教室を抜けて授業始まる頃に戻ってくればそれでいい。そのうちあいづらも諦めるだろう。

帰りは捕まりそうになった。だが俺の席は廊下に一番近い位置だから何とか逃げ

た。

「……」

また下駄をあけると……ゴミが大量に落ちてきた。靴の中にもたくさん画鋲が入っていた。

もしかして朝ちょっと関わっただけでダメだったのか？……はあ。疲れる。

その後、俺が小野寺達と関わるのをやめると、イタズラはなくなっていた。これで解決だ。ただ俺がぼっちに戻っただけ。

また最近はベストプレイスに行くようになった。一条のつるんでた時は一緒に食べたからな。

「付き合ってほしい」

ん？あれは……小野寺？ともうひとり先輩か？あー、告白中ってことか。

「ご、ごめんなさい」

「……どうしてかな？」

「えっとその……今は誰ともそういう関係になる気は無いんです」

「……好きな人でもいるの？」

「い、いえ！そういうわけじゃ……」

「ならダメかな？確かに俺と君はこれが初対面かもしれない。でも俺の評価は知ってるよね？付き合っても嫌な思いはさせないよ」

そういやこの先輩確か学校で人気のやつだ。名前は……忘れた。

「と、とにかくごめんなさい！」

「待ってよ」

小野寺がその場から立ち去ろうとすると、その先輩は腕をつかむ。

「ね？いいでしょ？」

「は、離してください！」

はあ……1回断られたんだから諦めろよ……腹減った。

「おい、あんたもう諦めろよ」

「あ？……比企谷八幡」

ん？こいつ今俺の名前呼ばなかったか？

「ひ、比企谷くん……」

「きみは誰かな？俺は今この子と話してるから向こうへ行ってほしいんだけど」

うわー爽やかスマイルですね。俺からしたら気持ち悪いだけだけど。

「さっきのたまたま聞いちゃいましてね。1回断られたんだから諦めたらどうですか？そんなしつこいと余計に嫌われますよ」

「なんだと？……ちっ。小野寺さん、俺は諦めないから」

そう言い残すとその先輩は去っていった。

ふう、やっと飯が食べれる。

「ひ、比企谷くん！」

「……なんだ」

「あ、ありがとう。すごく困ってたから……」

「別に、俺はいつもここで飯食ってるから早くどいて欲しくてしただけだ」

「それでも、ありがとう」

「……わかったから小野寺も早く教室戻れ。一条達も待ってるぞ」

「……八幡くん、何隠してるの？」

突然、小野寺が真剣な顔で訪ねてきた。まあそう来るわな。今まで普通に関わってきたのにいきなり関わるなどか言われたんだから。

「べつに何も隠してないぞ」

「嘘。じゃあ八幡くんどうして急に私達から離れたの？何かあったんじゃない？」

「嫌だったんだよ。普通に話してるふりしてただけだ。本当はいやで我慢してたんだよ、あいつらとつるものを」

「……八幡くんこんなこと昔もあったよね。私達が小学生のとき、急に八幡くんが私のこと遠ざけて。あの時もしじめられてた。今回も……」

「違う。だいたい小野寺達も俺と関わる必要ないだろ。理由がない」

そう言って俺は弁当を開ける。しかし中身はゴミが入っていた。

「は、八幡くんそれ……」

ちっ、体育の時にやられたな。まだ終わってなかったのか。

「……とにかく小野寺は関係な……」

「関係あるよ!!どうして相談してくれないの!? 1人で抱え込んで、それじゃ八幡くんが傷ついていくだけだよ!」

「別に俺は傷ついてなんかない」

「嘘。八幡くん今すごく悲しい顔してる。辛いんでしょ？もっと私達のこと頼っ

てよ……」

そう言うとき小野寺は涙を流した。傷つけないようにしてたのが逆に小野寺を傷つけていたのか……

「：小野寺、相談がある」

「！うん！」

そしてその後、一条達にも相談をして犯人がわかった。まあほぼ鶴とかのおかげなんだけど。それでもみんな協力してくれた。

そして犯人はあの時の爽やかイケメンだった。

「あなただったんですね」

「ばれちゃったか。それで？俺を殴るのかい？」

「そんなことしませんよ」

「なんでよ比企谷！こんなやつ1発殴らないと！」

「いい。こんなやつ殴る価値もない。とにかく、もう俺達に近づくな。そうすれば

先生達に報告することもない」

「…ま、俺もこれでも受験生だしやめるよ。悪かったね。それじゃ」

「なによあいつ！全く反省してないわ！」

「桐崎落ち着け。これで終わってくれれば一番いい」

「まあそうだけど…」

でもまさか桐崎がこんな怒ってくれるとは。意外と友達と思ってくれてるんだろ
うか。

「とにかく解決したしパーっと今から遊ぼうぜ！」

「舞子くんはもうちょっと落ち着いたら？」

「えー？ノリ悪いなあ、るりちゃん」

「その呼び方やめて」

「よかったね八幡くん」

「…」 ああ

翌日

下駄箱にも異常はなし、ほんとにやめてくれたようだ。

「ねえ比企谷くん」

その時、宮本が話しかけてきた。

「小咲知らない？あの子この時間ならいつも来てるんだけど……メールも返事なくて」

「小野寺？いや知らないが……」

その時先生が教室に入ってきた。

「よし席につけー。あれ？小野寺休みか？」

どうやら学校にも連絡は入ってないらしい。……嫌な予感がする。

ん？メール？……小野寺からだ。写真もある……!?

そこに写っていたのは、ガムテープで口を抑えられ、手を紐で縛られてどこかに監禁されている小野寺の姿があった。

俺はその次の文書を読む。

小野寺小咲は預かった。比企谷八幡、1人で学校の近くの廃工場に
来い。

簡潔にその文章だけがあった。

「ちっ！」

俺はすぐに教室を出て走り出した。

続く

16話

俺は廃工場につきすぐに中へ飛び込んだ。

「小野寺！」

「！八幡くん！」

「来たか」

そこには写真にあったとおり手を綱で縛られた小野寺の姿があった。

そして、小野寺をこんな目に遭わせた張本人であるあの時の先輩がいた。

「やっぱりあんたか」

「ほんとに1人で来たんだね。馬鹿正直なやつだ。……まあいい。それで？ 君はどうするつもりだい？」

「小野寺を取り返すに決まってるだろ。さすがに俺もキレたぞ」

もう我慢の限界だ。ここまでの糞野郎だったとは。

「キレたねえ……比企谷八幡、君はこの人数を相手に取り返せるのかい？」

そいつはそう言うの後ろから数人のいかにも不良っぽい奴らが出てきた。

…… まあそれくらいは予想済みだな。

「あ、あとそこから動くなよ。動いたら小野寺小咲がひどい目にあうことになる。……」

おいお前らあいつを潰せ」

そう言うのと、不良達は俺に殴りかかってきた。

「がはっ！」

いってえ……これいきなり肋折れたかも。

「なんだよコイツ、超弱いぞ！」

その後も俺は羽交い締めにされた。

「ぐっ……」

「八幡くん！！！！……も、もうやめてください」

「それは無理だなあ。俺の小咲に手を出したんだから」

「なにが俺の小咲だ……それはお前の妄想の中の話だろ」

「今はな。でもすぐに俺の女になるさ」

「なんだと……？」

「小咲ちゃん、こいつを助けたいかい？なら条件がある」

「条件……？」

「俺の女になれ。それならあいつを解放してやる。あ、でも行動で証明してもらおうかな。俺と今からやるんだ。君の意思で」

「て、てめえ！なにいつて……がはっ！」

「さあ？どうする？」

「……わ、わかりました」

「おい小野寺！そんなやつ言うこと聞くな！」

「うるさいぞ」

俺が必死で呼びかけると腹をまた蹴られる。

「がっ！……お、小野寺」

「ははっ、いい子だ。じゃあ縄を解くからまずは服を脱ぐんだ」

「……」

小野寺は言われるがままになる。

「ぐっ……」

その時

「八幡!! 小野寺!!」

「比企谷!! 小咲ちゃん!」

楽、霧崎、集、宮本、鵜、そしてその後にもヤクザが数人いた。

「楽……」

「遅くなってすまん! 今助ける!」

そう。俺はここにつく前、楽達にメールで救援を頼んでおいた。

さすがに一人で突っ込むほど馬鹿じゃない。

「ちっ、なんだこいつら! おい! お前らあいつらを潰せ!」

「どうやら身の程を知らないようですね……」

そう言うと、鵜は一瞬で不良達を一網打尽にした。

「これなら竜達いらなかったな」

「まあいいでしょ。念のためよ」

「ちっ! 動くな! お前ら! こいつがどうなってもいいのか!」

何とか助かったと思ったら、そいつは小野寺を人質にとった。

「ほんとゲス野郎ね……」

「…… お前らありがとう。ここからは俺がやる」

「八幡…… おう！ 任せたぜ！ 親友！」

「あいつをぶっ飛ばしなさい！」

「男を見せろ！ 比企谷八幡！」

「小咲をお願い」

「八幡！ 終わったら色々聞かせてもらうからな！」

みんなが背中を押してくれた。

「…… ああ」

「動くなと言っただろ！」

「…… お前だけは許さない」

「黙れ！ ほんとに殺るぞ！」

「やってみろよ」

「なんだと？ ……」

だがそいつはいつまでたっても小野寺を傷つけようとはしない。

「歪んでいるとはいえ、お前は小野寺のことが好きなんだ。ここまでするほどにな。」

だからお前は小野寺を傷つけられない」

「ぐっ……ちっ、ならお前を殺るだけだ！」

そう言うのと突っ込んできた。

「今のお前なんて怖くもなんともねえ……よ!!」

「が……はっ……」

相手のナイフをよけ、俺はみぞおちに思いっ切りパンチを入れる。

そしてそいつは倒れた。

「八幡くん!!」

小野寺が駆け寄ってきた。

「すまん……遅くなつて」

「ううん。嬉しかったよ」

そう言うのと小野寺は俺を抱きしめてきた。

「……」

俺は小野寺を抱きしめ返す。

「……おい、おふたりさーん、俺達もいるよー」

……忘れてた。

「!ご、ごごごめんね!いきなり抱きついて!」

「い、いや気にしなくていい」

「くう、羨ましい」

聞こえてない。楽の声は聞こえてない。

「小咲ちゃん、服服!」

「えっ……!」

小野寺は忘れていたのか顔を真っ赤にして後ろを向いた。

「ねえ、そーい、やこいつどうする?」

「警察にでもつき出すか。監禁罪とか色々あるだろうし。桐崎任せた」

「ええ!?!私!?!……はあ、クロード、お願い」

「承知いたしました」

「ねえねえ、そーい、ええ、小野寺さんさつき八幡のこと八幡くんって呼んでなかった

?」

集が突然そんなことを言い出す。こいつこういうことは覚えてるんだよな。全力

でごまかそう。

「……なんのことだ？」

「……あんた目が泳ぎすぎ」

「ぐっ……」

その後根掘り葉掘りはかされた。

「小野寺さんと八幡が小学生の時にねえ……」

「小咲、なんであんた言わなかったのよ」

「い、いやぁ話す機会もなかったし……」

「おい八幡！聞いてないぞ！」

「うるさいぞ楽、俺これでも怪我人なんだから」

肋も数本折れてるんですけど。

「じゃあじゃあ名前呼びってことはもしかして……」

「集の考えてるようなことはないぞ。ただ少し仲が良かっただけだ」

「……」

俺がそう言うと、小野寺が腕をつねってきた。

「いたいいたい！……なんだよ」

「少しなんだ」

「……ま、まあまあ……かなり仲良かったです」

「もうあんたら付き合えば？」

「る、るりちゃん!？」

「小野寺が……小野寺が……」

というかさっきまであんなことあったとは思えない空気なんですけど。

「ってそれより八幡くん怪我は!？」

「ん？別にこれくらいなんでもない」

「男なんだからそれくらい大丈夫よ！ほら！」

そう言うのと桐崎は俺の腹に軽くパンチしてきた。

「ぐっ……」

だが、今の俺にとっては軽くでも大ダメージだった。

「あ、あれ？」

「……」

さようなら小町。俺は天国へ旅立つよ。

「は、八幡くん？ 八幡くーん!!」

続く

17話

ううつ……ここは……知らない天井だ。

確か桐崎に腹パンされてから覚えてないな：

周りを見ると病室のようだった。部屋がやたら広いのが気になるが。

なんか周りに高そうな花瓶とかあるし。

「スヤ …… スヤ ……」

……なんか近くから寝息が聞こえるんだけど。そしてさらには腕になにか柔らかな感触があるんだけど。

俺は恐る恐る横を見てみた。……なんで小野寺が隣で寝てるの？

え、何この状況桐崎に腹パンされてそれから病院に運ばれたのはわかるよ？でもなんで小野寺が隣で寝てるんだよ。

「あ、おにいちゃん！」

その時、扉が開いて小町が入ってきた。

「起きたんだね！体大丈夫？」

「……ああ。心配かけたな。ってそれより今のこの状況説明してくれ」

「あゝ、小咲さんね。いやゝまさかお兄ちゃんにこんな彼女さんがいるとは……小町のポイント高いよ！」

「いやそういうことを聞いてるんじゃないんだよ」

「本当はね、小咲さんすごく心配してたんだよ。それでお兄ちゃんのそばにいたって言ったからなんとか許可をもらってこうなったわけ」

「それでなんで隣で寝ることになるんだよ……」

「よかったね！お兄ちゃん！」

「おーい、小野寺起きてくれ。小野寺ー」

「……あれ？八幡くん？なんでこんな近くに……！……！……！」

小野寺は状況を把握したのか顔を真っ赤にしてベッドから出た。

「ち、ちち違うの！最初は椅子で寝てただけだ！え、えっと、そ、そう！私寝相悪くて！いやそんなに悪くは無いけど！だ、だから自分からベッドに入ったとかじゃ……」

「わ、わかったから落ち着け」

「う、うん…… あ、そういうえbaumう体は平気？」

「まあ少し痛む程度だから心配ない」

「よかった……」

「…… えっと、小咲さん質問してもいいですか？」

「え？ こ、小町ちゃん！」

どうやら今小町がいたことに気がついたようだ。

「お兄ちゃんと小咲さんって付き合ってるんですか？」

「えっ!? ち、違うよ！ た、ただの友達！」

「そうだったんですか。友達ですか…… 小咲さん、ちょっとカモン」

「え？ う、うん…… ええっ!? うん…… そ、そんなの私には！…… え？ でも…… うん」

何話してるんだあいつら？

「よし！ この話は終わり！」

「何話してたんだ」

「そんな野暮なこと聞いちゃいけないよ、お兄ちゃん」

「あっそ……そういや小町はおぼえてたんだな、小野寺のこと」

「……え？」

「いや、なんかすごい仲良さそうだから小町はおぼえてたんだろ？小野寺のこと」

「……おぼえてたって何を？」

「だから、俺達小学生の頃にあってるってことだよ」

「………は？」

「え？」

「………あゝ！………！ 思い出した！……！ 小咲お姉ちゃん！最初名前聞いた時なんか違和感あると思ったんだよ！」

「お前も覚えてなかったのかよ」

「いやゝ、テヘペロ！どうして言ってくれなかったんですか！」

「え？タイミングもなかったし……」

「なるほどなるほどそれならあのことも納得……あ！それなら春ちゃんは元気ですか!？」

「あ、うん。今は女子寮の中学に通ってるよ」

「いやゝまた会いたいなゝ」

「春？」

「ほら、お姉ちゃんの妹さんだよ」

「あゝ、そういやいたな。確か俺めっちゃ怖がられてた記憶がある」

「まあお兄ちゃんの目を見ればね……」

「多分春も来年はうちの高校に通うと思うよ」

「ほんとですか!? 小町もお兄ちゃんと同じところ目指してたんですよ! いやゝまた再会できるなんて! 小町感激!」

「というかお前騒ぎすぎ。ここ病室だぞ一応」

「あつ、忘れてた。まあとりあえず、お兄ちゃんは早く体治してね。」

「さあお姉ちゃん! 今から小町と近くのカフェでゆっくり話しましょう!」

「え? う、うん」

「それじゃあね! お兄ちゃん!」

「え? あいつ俺のお見舞いに来たんじゃないの? 着替えとか色々もらってないんだけど。……あとで電話するか。」

続
く

番外編 新婚生活!?

読者様専用のt w i t t e rアカウントを創設しました!

活動内容なども更新する予定なのでよろしければフォローお願いします!
ユーザー名@y o u l k m e n : w r i t e r

「ふわああああ……おはよう」

「あ、おはよう八幡くん! 朝ごはんもう少して出来るから」

……あれえ? どうして小町じゃなくて小野寺の声が聞こえるんだ?

ここ俺の家だよね?

俺は目の前の光景を再認識するために目を凝らしてキッチンを見ている。
……………

裸エプロンの小野寺が立っていた。

「ちょっと待て、小野寺なんだその格好は!」

「お、男の人はこういうの喜ぶってネットに書いてあったから……」

「それ絶対いかがわしいサイトだから!」

「あと小野寺じゃなくて小咲!」

「あー、そうだったな小咲……じゃなくて!服を着ろ!」

「……嫌だった?」

「むしろ襲いたいくらいエロくて男としては最高です。……ってそうじゃない!とにかく服を……」

「……襲ってもいいよ?」

「……は?何を言ってるんですか?襲ってもいいって言ったこの子今。」

「いや、襲ってもいいってお前」

「私達夫婦なんだし……そ、そういうこともやっぱりするだろうし」

「夫婦だもん……って違う!夫婦!俺達がか!」

「?どうしたの?体調悪い?」

待て待て待て。俺と小咲が夫婦!?なんだこの状況は!?夢か?夢なんだな!うん、夢!夢じゃないとこいつがこんな恥ずかしいことするわけないし。まず俺こんな突っ込むキャラじゃないし。

「俺は大丈夫だから、とにかく服を着てくれ。……そ、その小咲の体は大事な時だけ見たいからさ」

「わ、わかった」

何を言ってるんだ俺はあ!?! もうやだ……でも少し結婚生活を体験してみたい。まあそのうち目覚めるだろ。

「あ、そうだ！前言ってた約束、今日にしない？」

なんかやってまいりましたショッピングモール。まあ小咲といるのは楽しいし今は夢の中を楽しむでしょう。

「はい、あーん♪」

「あ、あーん」

おい待て、夢の中で俺こんなことしてんの？

「美味しい？」

「……美味しい」

「よかった！じゃあ八幡くんのも一口もらっていい？」

「ああ。ほら」

「あーん」

「……」

これ俺もやらなきゃいけないのか。仕方ない、これは夢だ。

「あ、あーん」

「…うん！これもすごく美味しい！」

「そりゃよかった」

「あれ？小咲ちゃん!？」

「え？あ！千棘ちゃん!」

目の前に現れたのは桐崎と楽だった。

「千棘ちゃん達もデート？」

「ええ、まあね」

「何お前ら、まだ偽恋人役やってるのか？」

「何言ってるんだ八幡？俺達は結婚しただろ。披露宴も呼んだじゃないか」

……つまり夢の中では偽恋人だったのが本物になってたわけか。

このふたりがくつつくとはね……待てよ、集とかは……

「な、なあ、集って結婚したっけ？」

「え？まだだろ？宮本にまだアタックしてるって」

「でもるりちゃん、満更でもないみたいだよ？たまにあって話す時とか舞子くんの話が多いし」

おお、なんか宮本のそんなところ想像出来ないわ……

「あ、私達そろそろ行くわね」

「うん。またお茶しようね千棘ちゃん」

「八幡、またな」

「おう」

「いやー、楽しかったね！久しぶりのデート！」

「まあそうだな」

久しぶりって俺は何か忙しい仕事でもしてるのか？

「次のドラマ主役なんでしょ？頑張ってるね！」

……ど、ドラマあ？

「おれってもしかして俳優とか言わないよな……」

「何言ってるの？俳優でしょ？あ、でも最近はドラマとか多いし役者さんとかかな？」

オーマイゴッド……俺が芸能人って、めっちゃくちゃだなこの世界。

「あ、あのさ。2人で一緒にいられるのもあまりないし……お風呂一緒に入らない？」

「……」

どうしてこうなった。今は小咲と混浴中。いや訳分からん。

そして今のこの態勢はなんだ？俺の股の間に小咲が座っている状態だ。俺こんな耐えられないよ！

「えへへ」

小咲はすごい嬉しそうだ。もう俺夢醒めなくてもいいかも。

「八幡くんおつきくてあったかい……」

「……そりゃ男だから女よりは体つきは大きいだろ」

「そうなんだけどね……は、八幡くん、あ、あたってる……」

「え？……す、すまん!!」

いつの間にか俺の息子が興奮していたらしい。仕方ないじゃん！心は高校生男子なんだから！理性抑えるのに必死なんだよ!?

「……八幡くん……っ」

すると、突然小咲はこちらを振り向きキスをしてきた。

「えへへ。久しぶりにしちゃった」

……ごめん。俺もう限界。

「……朝か」

結局あの後も目覚めぬまま最後までイってしまった。

いや普通こういうのっていいところで目覚めちゃうとかでしょ？

最後までいっちゃったんだけど。もうこれから小咲と会う時どう接すればいいかわからんぞ。

「あ、八幡！」

「うっす」

「あ、は、八幡くんおはよう……」

「お、おう……」

「？なんで八幡も小野寺も顔赤いんだ？」

「平常心平常心……」

「顔合わせられないよお……」
『??:?』

終わり

18 話

遅くなって申し訳ない：忙しいんです、許して

事件から数日経ち、俺の怪我もすっかり治った。

「おにいちちゃんおにいちちゃん」

「なんだね小町さんや」

「夏休みだね」

「そうだな」

「なのにどうして小町達は家でゴロゴロしてるんでしょうか」

「別にする事ないからだろ」

「そうです。なので！今から小咲お姉ちゃんの家に行きます！」

「ちょっと待て、どうしてそうなる」

「おにいちゃん、小咲お姉ちゃんに誕生日プレゼントあげた？」

「あいつもう過ぎたのか？」

「このごみいちゃんは：小咲お姉ちゃんの誕生日は6月15日！」

「へえ」

「全く：ということ、おにいちゃんは小咲お姉ちゃんをお祝いしてあげなきゃいけないのです！」

「いや、いまさら祝っても」

「NO！早いも遅いもないのです！お姉ちゃんぜったい喜んでくれるから！プレゼントを用意する！」

「それに小野寺忙しいかもしれんぞ？」

「大丈夫！もう約束してあるから！」

この子はなんでこういうことに関しては準備が早いんだろう。

勉強にもそれくらいやる気を出して欲しい。

「小咲お姉ちゃん！お邪魔します！」

「いらっしやい。小町ちゃん、八幡くん」

「すまん、小町がわがまま言ったみたいで」

「うんうん、私もまたお話したかったから気にしないで。さ、上がって！」

「おにいちゃん」

「ん？」

「今日はゲストもいるよ♪」

「ゲスト？」

そして俺達はリビングに案内された。そこにいたのは…

「…お、お久しぶりです、お兄さん、小町ちゃん」

「…春、だよな？」

「は、はい」

「春ちゃん！久しぶり!!会いたかったよお！」

「こ、小町ちゃん！暑いよお！」

「ゲストって春のことだったのか…」

まあたしかに驚いたわ。夏休みだし帰ってきていてもおかしくないか。

「元気だったか？」

「は、はい。お兄さんは相変わらず…」

「目はデフォだ。治らん」

「べ、べつにそういう意味で言ったわけじゃありません！」

「あとさ、お前なんでさっきから敬語なの？」

「え？えっと…」

「わかってないなー。春ちゃんは久しぶりにおにいちちゃんと会ってどう接すればいいのか分からないんだよ」

「べつに昔みたいでいいぞ？」

「…う、うん。わかった」

「それにしても春ちゃんさらに可愛くなっちゃったなー！もう抱きしめたい！」

「お前もう抱きしめてるだろ」

「こ、小町ちゃんこそすごい美人だよ」

「ありがとー！…おにいちちゃんはどう？」

「ええっ!?…す、すごくかっこよくなったと…思う」

「わざわざお世辞言わなくてもいいぞ…」

昔はめっちゃ怖がられてたからな。まあ今は昔ほど怖がられてはいないけど。

「ううん、本当にかっこよくなったよ、お兄さん」

「…」

やばい、春の顔を見れば本心で言ってるのがわかってしまっすぎてすごい恥ずかしい。

「…春ちゃんも成長したね!」サッ

「?…どういうこと?…」

「今のセリフ恥ずかしくてそう言えないよ!」

「…っ!! お、お兄さん! 今の忘れて!」

「ええ、今結構キュンと来たのに」

「おにいちちゃんがそんな事言ってもきもいだけだよ」

「小町にキモイって言われた…」

「うう…」

まあでもなんかこういう時間は楽しいな。この4人でいるのはなんかしっくり

来る。

「そういや、おばさんはどうしたんだ？」

「お母さん？今はちょっと出かけてるんだ。なにか用があったの？」

「いや、大したことじゃない」

昔のこととか聞いてみたかったんだけど、まあ今度でもいいか。

「それじゃあ今からどうしょっか？」

「…」

「…」

「…お前ら約束しといて何するか決めてないのかよ」

「あはは…いやー春ちゃん帰ってくるって聞いて会いたかったので頭いっぱいだったから」

「まあじゃあ…ほら小野寺」

「え？…これって？」

「あー…遅くなっちゃったけど、誕生日プレゼントだ。桐崎は祝ったのに小野寺だけ祝いが無いのも変だしな」

「…八幡くん…ありがとう！すごい嬉しいよ！」

「お、おう、そうか」

「開けてみてもいい？」

「ああ」

「…わあ！綺麗な髪留め！」

「おお、おにいちちゃんにしてはセンスがいい！」

「お前失礼だな」

「…えへへ、どうかな？」

「っ…いい感じだと思うぞ」

「おにいちちゃん、今見惚れたでしょ」

「ば、ばっか！ちげえよ！」

そう、別に見惚れてたわけじゃない。うん。後ろの窓にいたとう虫に見惚れてたの。うん。

「うわー、すごい必死」

「ほんとにありがとう！すごい嬉しい！」

「まあ喜んでくれたならなによりだ」

「いやゝ良かったねおにいちちゃん！これ！小町からもプレゼントです！」

「小町ちゃんも？ありがとう！」

「わあ！ブレスレット！」

「お姉ちゃんイメージして選んだんだ！」

「とっても可愛いよ！2人とも、ほんとにありがとう！」

小野寺も喜んでくれたみたいで良かった良かった。

続く

19 話

遅くなって申し訳ないm(̇)(̇)(̇)m

と。笑。——

「はーい！…小咲お姉ちゃん！」

「こんにちは、小町ちゃん。八幡くんいる？」

「いますいます！お兄ちゃんー！」

「なんだよ…小野寺？」

「こんにちは、八幡くん」

「どうした？何か用か？」

「う、うん。えっとね…」

すると、小野寺は急にモジモジし始めた。

言い難いことなのか？

「…は、八幡くん！」

「は、はい」

「そ、その…あ、明日なんだけどね！」

「明日？なんかあったか？」

「明日…はっ！小町わかりました！小咲お姉ちゃん！ファイト！」

「う、うん…明日縁日で神社でお祭りがあるんだけど…い、一緒に行かない？」

「宮本とかと行った方が楽しいんじゃないか？」

「はあ…これだからごみいちゃんは…」

「そ、それもそうなんだけど…八幡くんと行きたいんだ」

「こ、小咲お姉ちゃん…！…ああ！そういえば小町買ってきて欲しいのがあったん

だ！小咲お姉ちゃんに頼むのもあれだしお兄ちゃん買ってきてくれないかなー！」

「…わかったよ。行けばいいんだろ」

「！ありがとう、八幡くん！」

そして次の日の夜。小野寺とは神社で待ち合わせになった。なんかその方が雰囲気が出るらしい。知らんけど。

「は、八幡くんお待たせ！」

「お、おう……」

小野寺は浴衣を着ていた。正直めちゃくちゃ可愛い。

「……そ、その浴衣似合ってるぞ」

「あ……あ、ありがとうございます……えへへ」

「……行くか」

「う、うん！」

「たくさん屋台あるね」

「そうだな」

「そう言えば小町ちゃんに何頼まれたの？」

「りんご飴と、今日限定のお守りだそうだ」

「小町ちゃん好きな人いるの？」

「……は？」

「き、今日限定のって恋結びのお守りだよ？」

…な、なんだと。こ、小町好きな人いるのか!? ゆ、許さんぞお兄ちゃんは！ ずっとぶっ飛ばしてやる！ 誰だ!? 坊主頭か？

「は、八幡くん大丈夫？」

「あ、ああ」

落ちて着け落ちて着け。もしかしたら誰かに渡すためかもしれん。女友達に頼まれたとか。うん。そういうことにしよう。

「よし、行くか」

「? うん」

「おっ、八幡の坊ちゃんじゃないですか！」

「ん? 楽のとの…」

「俺達今いろんな場所で屋台出してるんすよ。八幡の坊ちゃんならただでいいですよ！ 楽坊ちゃんとは友人ですからね！」

「いいんですか? ありがとうございます」

「良かったね。ただでもらえて」

「ああ。しかも美味しい」

「次どこ行こっか…あ」

「ん？すごい混んでるな…」

「きつとお守りの列だよ」

「列って言うのかこれ？…並ぶか」

「まさかこんなに混んでるなんて思わなかったね」

「確かに。そんなに恋愛脳多いのかこの辺は」

「別にそういうわけじゃないと思うけど…きやつ」

「おっと。大丈夫か？」

「う、うん。ありがとう…は、八幡くん」

「ん？」

「そ、その…て、手握ってもいい？はぐれちゃうと困るし…」

「…まあそうだな。…ほら」ヤッヒ

「！ありがとう…えへへ」

恥ずかしい柔らかい恥ずかしい！小野寺の手ってこんな小さかったんだな…っ

て余計な事考えるな。これははぐれないための手段だ。うん

「あ、順番きたよ」

「恋結びのやつ2つお願いします」

「買えてよかったね」

「ああ。…小野寺、これ」

「え?…ええ!?!」

「本当は屋台とか奢ろうかと思ってたけど、タダだったからな。まあそれ限定品らしいし、やるよ」

「そ、そういう意味…はあ」

「ん?そういう意味って?」

その時、宣伝の声が聞こえた。

「恋結びのお守りは好きな人にあげるとプロポーズの意味があるから、帰り道とかにそっと渡すとすごくロマンチックですよー!」

「…」

「…」

…そういう意味ってそういうことか。

「…ま、まあこれは記念ってことで」

「う、うん。ありがとう八幡くん、凄く嬉しい」
ハハ

「！ああ」

やばい。今の笑顔やばい。その辺の男子なら即落ちしてるレベル。

「少しずつお客さんも減ってきたかな？」

「どうだろうな」

そういや楽とかも来てたのか？会わなかったな。

まあこの人だからだしな。

「…」

「？小野寺？」

そういえばさっきから小野寺に違和感を感じる。

「…お前、足…」

「あ、あはは。履き慣れてなくて」

「ちょっと見せてみる。…怪我してるな。痛くなかったのか？…とにかくこれじゃ歩けんな…」

「大丈夫だよこれくらい…うっ」

「大丈夫じゃないだろ。…ほら」

「…え？」

「背中乗れ。その状態じゃ歩けん」

「で、でも」

「気が変わらんうちに早くしろ」

「う、うん！…重くない？」

「別に。むしろ軽いぞ」

まあ人を担いでるわけだから当然重いことには重いが。

「ごめんね。普通の私服で来れば…」

「こういう時は浴衣とか着るもんだろ。気にするな。それに何かあった時のために俺がいるのもあるしな」

「ありがとう、八幡くん」

「…」

「…」

「…私ね、まさかこうやって八幡くんとお祭りに来ることが出来るなんて思わなかったな」

「そんなの俺もだ。ぼっちライフを過ごすつもりがいつの間にか…」

「でも、嫌じゃないでしょ？ 一条くんとかと話してる八幡くん、楽しそうだもん」
「…そうかもな」

俺も少し変わってきてるのかもしれない。いつの間にか楽や小野寺達と関わるようになって。これじゃボッチ失格だな。

「私は八幡くんとまたこうして再会できてすごく嬉しかったんだ。あんな別れ方嫌だったし…」

「あの時は悪かったよ」

「もうあんなことしちやダメだよ？」

「しないしない」

「…ほんとに？」

「…ああ。しないから安心しろ」

「うん。わかった。それなら安心だね」

「…ついたぞ」

「ありがとう八幡くん。またね」

「ああ」

「…八幡くん！」

「ん？」

「私、私頑張るから！それだけ！おやすみ！」

「あ、ああ？」

何を頑張るんだ？

続く

20 話

「「おおー!!!」」

今日は楽達と海に来了。まあ最初は当然断つたが海行かないと小町が口聞かないとか言うんだもん。

「じゃあ私たち水着に着替えてくるから用意よろしく」

「あいよ。八幡手伝ってくれ」

「はいはい」

「そっちもつと引つ張れるか？」

「こんくらいか？」

「なあなあ楽、八幡くそんなことよりもつと周りを見渡そうぜ！そこらじゅうにナイスバディなお姉えさんがたくさん…」

「集も手伝えよ…」

「集だけテント入れねえぞ」

「お待たせー」

女子陣が着替えを終え、戻ってきた。うん。これは目の保養になりますね。

「おっ！これはこれは……はあ」

集は女子の水着を見ていき……宮本を見るとため息をはいた。あいつ絶対胸見てたな。

「ふんっ！」

「ぐふっ！」

あ、吹っ飛ばされた。

「ったく集のやつは……」

「楽様！どうですか？私の水着」

「お、おい！あんまりくつつくなよ！」

「いいではありませんか！」

「ちよっと万里花！あんまり楽に引っ付かないでよ！」

……楽そろそろ爆発しないかな。

「は、八幡くん」

「ん？小野寺」

「ど、どうかな…?」

「…に、似合ってるぞ」

「あ、ありがとう」

「ありゃ? 誠士郎ちゃん今日は女の子らしい水着だね」

「お、お嬢が選んでくださったのだから…恥ずかしい」

「似合ってるぞ?」

「!う、うるさいばか!」

「なんで!」

「楽を1発ぶん殴りたい気分だ…」

「それにしても相変わらず大きいわね…えいっ!」

「お、お嬢! な、何してるんですか!」

「桐崎は突然鷓の胸を鷺掴みにした。…うらやまけしからんな。」

「おお…あんたまたでかくなったんじゃない?」

「な、なってません!」

そういうことは男子のいないところでやって頂きたいですね全く。

どんどんやりなさい。

「冷たい！鵜も早くこっち来なさいよ！」

「お嬢待ってください！」

「る、るりちゃん水かけないでよ！」

「それー」

「後なんでそんな棒読みなの!？」

「楽様、日焼け止めを塗っていただけませんか？」

「は!？」

「じゃあ俺が塗ってあげるよー！」

「あなたは今すぐ土に還ってください」

「ひどいなー橘ちゃんー」

騒がしいやつらだな全く：

ちなみに俺は浮き輪の上でプカプカ浮いております。

「それ！」

「どわっ!?…ふはっ!…桐崎何しやがる」

「あんたももつと騒ぎなさいよ!海よ海!」

「お前らは騒ぎすぎなんだよ…ぶっ!」
こゝろぎゃーぐ
!

すると今度はどこからかビーチボールが飛んできた。

「俺らと海に来てのんびり出来ると思うなよ?」

「…集、てめえ…うおっ!?危ねえな!楽まで何しやがる!」

「ははは!千棘!」

「おっけー!とりゃー!」

「どわっ!俺ばっか狙うな!」

「小咲、あんたどさくさに紛れて比企谷くんに抱きつきなさい」

「何言ってるのりちゃん!?」

「じゃあ食事当番決めようぜ。みんなくじ引いてあたりが出たら食事当番!」
「はずれですわ」

「私もハズレだ」

「あ、私も」

「俺もだ」

「私もよ」

「じゃあ俺は…俺もハズレだな」

「…あたり」

「わ、私も」

結果、俺と小野寺が食事当番になりました。

どうしよう、嫌な予感しかない。

「よし、じゃあ小野寺は材料の準備を頼む。俺が食材切ったりするから」

「私もやるよ？」

「大丈夫だ。小野寺は食材の準備とかを頼む。いいな？ほかは何もするなよ？」

「う、うん？」

「おおー！美味い！」

「ほんと！あんた楽と同じくらい料理うまいんじゃない？」

「まあ俺は目が腐ってること以外基本高スペックだからな」

「自分で言うのかよ……」

「それにしてもホントに美味しいですわ。今度料理教えて欲しいくらい」

「わあ！綺麗！」

「おい集！花火こっちに向けるな！」

「綺麗ですわね」

今はみんな花火に夢中だ。まあ俺は少し離れたところで休憩してるけど。

「八幡くん、隣いい？」

「ん？小野寺か。いいぞ」

「ありがとう。…今日は楽しかったね」

「俺は集達にボロボロにされたけどな」

「あ、あはは……もうすぐ夏休みも終わっちゃうね」

「そうだな。宿題やったか？」

「うん、八幡くんも？」

「俺は最初の方に終わらせておいたからな」

「さすがだね」

「…」

「…」

「…ねえ八幡くん」

「なんだよ？」

「……キス、してもいい？」

「………え？は!？」

い、今小野寺なんて言った!? き、キス? 接吻!? 口づけ!?

「……!!!! い、いい今のなし!! い、今のはつい考えてることが出ちゃったというか! と、とにかく今のは忘れて!! あ! わ、私先戻ってるね! それじゃ!」

「あ、おい…」

猛スピードで戻ってたよ…それにしても、なんで小野寺のやつ急にあんなこと言ったんだ…?

続
く

21話

海へ遊びに行つてからさらに数日が立ち、夏休みも終盤を迎えていた。

「あと2日で終わり…はあ…2ヶ月足りない…って！」

そして、俺の願いも虚しく夏休みも終わり、二学期がやって来た。

「さて諸君！二学期になった訳だが二学期と言えば文化祭！文化祭と言えば劇！うちのクラスはロミオとジュリエットをやることになった訳だが…ロミオとジュリエット役に俺は楽と桐崎を推薦したい！」

文化祭実行委員である集がそんなことを言い出す。まあこいつらがカップルなのはクラスの奴らも知ってるし妥当かもな。まあ偽恋人だけど。

「…私やらない」

「ありゃ？びっくりだと思ったんだけどな」

「なら楽様！わたくしとぜひ！桐崎さんも構いませんわよね？」

「：好きにすれば」

この桐崎の態度。あの海の1件からこいつら2人の空気がおかしい。

何かあったのは確かだろう。

「彼女さんの許可も出たことですし、楽様！」

「それなら俺も！」

「おい一条！俺にロミオ役やらせろ！」

「だあ！もううるせえな！」

結局くじ引きになり、ロミオとジュリエットに決まったのは…

「くっ、また一条なのか…」

「小野寺さんなんて羨ましい！」

そう、楽と小野寺。

「よろしくね、一条くん」

「あ、ああ！」

嬉しそうですね。楽さん。

「お、小野寺さん！私と役を交代してください！」

「橘ちゃん、くじ引きで決まったんだから仕方ないよ」

「ああ！楽様〜！」

あいつは楽の事になるといつも騒がしいな：

「八幡くんは何やるの？」

「兵士役」

「：そ、そっか」

地味な役で悪かったな。

そして練習開始。楽も照れながらではあるがちゃんと練習し、順調に文化祭に向けて進んでいた。しかし、事件は突然起こった。

休憩中、廊下で楽が桐崎にビンタをされたのだ。いや、まあ吹っ飛ばされることは多々あったが、それではない。明らかに陰悪な雰囲気だった。

「…悪い、ちょっと頭冷やしてくるわ」

「一条くん達、やっぱり何かあったんだ…」

「いつもの感じではなさそうだな」

「大丈夫かな…？」

「俺達は事情知らないしな。あいつらで何とかするしかない。当日に何も起こらなければいいが…」

そしてついに文化祭当日。あれからは大きなことは無かったがまだ楽達は喧嘩してるようだ。喧嘩が知らんけど。

「寺ちゃん！大丈夫!？」

「う、うん。これくらい…っ！」

「捻挫してるな…これじゃ劇には…」

「そんな…」

ちっ、ここで問題発生か。ほんとに何か起こるとは…

「橘は代役できないのか？」

「橘さんは昨日熱が出ちゃったみたいで…」

あいつ何のために代役いると思ってるんだ…まあ熱が出てしまったものは仕方ない。

「どうしたんだ!？」

そこに楽が駆けつける。

「小野寺が捻挫しちまったんだ。代役の橘も休みで万事休す」

「そんな…」

「…桐崎」

「え？」

「あいつなら出来るんじゃないか？あいつなら台本くらい一瞬で覚えられるだろう？」

「そうか！」

「楽、頼んだ」

「お、俺？でも俺じゃ…」

「お前達の状況はわかってる。だから尚更だ。おそろくここしかないぞ、お前らが

仲直りするには」

「八幡…ああ。わかった！」

「まったく世話かけさせやがって…」

「どうしよう…私のせいで…」

「小野寺、お前のせいじゃない。事故なんだ、仕方ない」

「でも…」

「…なら責任をとってもらう」

「…え？」

「小野寺のせいで劇が出来るか分からなくなったんだ。その本人も責任を感じてるなら責任をとってもらう」

「ちょっと比企谷くん！寺ちゃんのせいじゃ」

「楽と桐崎を信じろ」

「八幡くん…」

「それが責任の取り方だ。楽と桐崎を信じろ。楽は普段憎たらしいがやる時はやる奴だ。多分」

「最後の余計だよ……」

「桐崎だって普段はツンツンしてるが素直じゃないだけだ。ちゃんと話し合えばいいだけなんだよ、あいづらは。だから信じて待て」

「……うん。待つよ。一条くん達はきっと来てくれる」

「ああ」

「おーい！待たせた！」

「来たか」

楽は無事桐崎と仲直りしたようだ。

「行くぞ！」

「おう！」

そして、ついに舞台開演。劇は順調に進んだかと思われた……

「屋敷から抜け出そうとするロミオ。召使いの制止も聞かずジュリエットの元へ行く」とします

「本当に行ってしまうのですか」

鵜のやつ棒読みだな……

「キャピュレット家の者があなたの命を狙っています」

「私はどうしても行かなければいけないのだ。彼女は今もバルコニーで待っている」

「止まらないロミオ。そして召使いはある決意をするのです！」

…こんなシーンあったか？

「実は召使いはロミオに恋をしていたのです！」

あいつふざけ始めたなこれ…

「召使いはこれが今生の別れになると思い、愛の告白を決意するのであった！」

「そ、そんなの聞いてないぞ！」

「つ、鵜！周り周り！」

「！ぐっ……ろ、ロミオ様、じ、実は私あなたのことが……す……す……って言えるかー

!!」

「おおーと！告白失敗！」

何やってるんだあいつ…

「舞子集はどこだー！」

「す、進むか」

「お待ちくださいロミオ様！」

「おおっと、ここで新たに刺客が現れた！」

「私は…えっと…ジョセフィーヌ！ロミオ様の本当の恋人ですわ！」

「た、橘!？」

あいつ熱じゃなかったのか…

そして橘はそのまま演技を続け、楽を止めようとするが楽の言葉で橘撃沈。そして次に現れたのが…

「私はジュリエットの兄、フリードリヒ！」

…桐崎の所のギャングのクロードさんだった。もはや生徒ですらない。

「なんでいるんだよ!？」

「きさまにジュリエットをやるわけにはいかない！貴様さえいなければ…ジュリエットは我がもとに！」

「おおっと！どうやら重度のシスコンでいらっしやる模様！」

あいつ楽しんでるな…

そしてフリードリヒはロミオを追い詰めていく。

ロミオは悪あがきでレンガを投げる。そして…城壁を支えていたレンガも。

「！しまっ！」

「ろ、ロミオー！」

ロミオとフリードリヒは城壁の下敷きに…大丈夫か？

「果たして決闘に勝ったのは…」

「…！ロミオ！」

「…い、今行くぞ、ジュリエット！」

「ロミオだー！」

客陣から歓声が巻き起こる。なんか俺も乱入したくなってきた。

「待て！」

「…は、八幡!？」

「な、なんとまだ乱入者がいたー！」

「俺の名は…リアム！ジュリエット様の兵士！ジュリエット様は俺の物だ！」

「兵士はジュリエットに恋をしていたー！叶わぬ恋…それが認められないリアムはロミオと対峙します！あとなんか名前かっこいい！」

そうだろう。俺がだてに黒歴史だけを作ったと思うなよ……！

「ロミオ！俺はお前を恨んでる男子全員の代表として倒す！」

「それ劇関係くない!？」

普段橋とか桐崎とかと仲良くしてるお前が悪い。

「勝負だ！爆ぜろリア充！弾けろシナプス！パニッシュメント……」

「こ、この先は問題ありそうなので神の力で兵士撤収！」

「お、おいまだセリフ終わってないぞ！」

「あいつあんなキャラだっけ……」

いやーちょっと浮かれた。

「そしてついにあらゆる刺客を退け、ロミオはジュリエットの元に！」

「……ああロミオ、あなたは どうしてロミオなの？あなたがモンタギュー家のロミオでなければこの愛を邪魔するものは何も無いというのに……そのロミオという名のかわりに、私の全てを受け取ってください」

「……頂戴しましょう。……愛しのジュリエット」

「……ええ」

そして、劇は無事？閉演した。

「「おつかれー！」「」

「いやー！なんとか終わったな！」

「おい舞子集！きさまあれはどういうことだー！」

「ったく騒がしいな…小野寺、もう足は大丈夫か？」

「うん。それにしても千棘ちゃんさすがだね」

「そうだな」

「でも1番驚いたのは八幡くんが劇に乱入したことかな」

「いや、なんか体が勝手にな…」

恥ずかし恥ずかし恥ずかしい！何故あんなことを！黒歴史確定だ…

「……私も出たかったなあ…」

「…」

小野寺は劇の練習も熱心に取り組み、努力した。それが当日に捻挫して出られなかったんだ。相当悔しいだろう。

「…小野寺、これはただの提案だが…」

「わあ！綺麗な夕日！」

「ここなら誰もいない。思いっきりできるぞ」

「うん。でも少し照れるな。八幡くんセリフ覚えてるの？」

「楽の練習ずっと見てたからな。嫌でも覚える」

「そっか。…そのロミオの衣装、似合ってるよ」

「お、おう…小野寺もな」

「ありがとう…」

「…じゃあやるか」

「うん」

「…愛しいジュリエット、僕は君と僕とを隔てる全てが憎い…どうして神は僕達にこのような試練を与えるのでしょうか」

「…ああ何故私達の両親は憎み合い、争うのでしょ…本当なら私たちのように手を取り合い、想い合うことも出来るというのに」

「…いけないジュリエット、もう別れの」

「八幡くん！」

「…小野寺？」

「…ありがとう。嬉しい…凄く嬉しい！」

その時の小野寺の顔は、夕日に照らされ、今までで1番輝いて見えた。

続く

22話

文化祭も無事終わり、次にやって来るのはそう……

「体育祭！！！」

「みんな勝つぞー！」

「おおー！！」

「なんで男子だけこんなやる気なんだ？」

「なんか、一位になったら好きな女子とデートできるんだとさ」

「そんなこと誰が言ったんだ？」

「恭子先生」

「：あいつらよく騙されるな」

「最初は400mリレー！みなさん、気合を入れていきましよう！」

「じゃ行ってくるわ」

「楽々頑張れよ」

「一条くん、頑張って！」

「楽！負けたらぶん殴るからね！」

「おう！」

「お前あそこで転ぶなよ…」

「し、仕方ないだろ！」

ラスト直前、うちのクラスのアンカーである楽と5組のアンカーが一位争いをしていたんだが、ゴール直前で楽は転んでしまったのだ。

そして、競技はどんどん進んでいき、ついに俺の競技。

「ラストは借り物競争！これは難易度が高いほどポイントが多くもらえます！運も実力のうち！みなさん頑張ってください！」

この俺にかかれば一瞬だ。…直感的にこれだ！

「どれどれ……」

……う、嘘だろ…

「どうしたんだ？八幡のやつ、固まってるぞ」

「何引いたんだろう？」

「うわ！あいつ涙目でこっち見てきた！一体何引いたのよ！」

ど、どうすれば…俺に恋人なんていないぞ!!

紙に書かれていたのは、恋人だったのだ。

「助けてらくえもーん！」

「気持ち悪いぞ!? 何書いてあったんだよ!？」

「これだ…」

「どれ…恋人…」

「なによこれ！いなかったらどうしようもないじゃない！」

「…私に案があるわ」

「宮本？」

「…小咲、あなたの出番よ」

「…え？」

「おっと！1着は比企谷八幡選手！お題は…恋人です！これは恋人がいなければ不可能な問題！しかし成功すれば大きなポイントになります！お相手は…寺ちゃん!？」

「お、小野寺さん!？」

「お、小野寺さんに彼氏いたのか!？」

「あの腐った目のやつ、羨ましい！」

どうしてこうなった：

「な、なんか凄い騒がしいね…」

そりゃ小野寺は結構男子から人気あるから騒ぐのかもしれない。

「比企谷くんと寺ちゃんって付き合ってたの？」

「え、えっと…あはは」

「ほら、もうゴールしたしいいだろ？」

「…まだダメです！」

「は？」

「恋人のフリをしている可能性があります！ここで恋人である証拠を見せてもらいます！」

「はあ!？」

「ええ!？」

なんかめんどくさいことになってきたぞ…

「こちらが出す指示をその通りやれば本当のゴールです！」

「し、指示って…？」

「…お互い10秒間抱きしめあってください！」

（…ええー！！？）

「恋人同士ならできますよね？」

「ぐっ…」

これはまずいぞ。どうすれば…

「…は、八幡くん」

「小野寺…？」

「…私は大丈夫だから…しょ？」

「で、でもな…」

「私じゃ嫌、かな…？」

「いやむしろ嬉しい」

「え？」

「…何でもない。…ほんとにいいのか？」

「う、うん。勝つためだし…」

「…わ、わかった。…いくぞ？」

「う、うん」

「…」ヤッ

「…！」

恥ずかしいいい匂い恥ずかしい！リア充はこんなこと普段やってるのか。どんな思考回路してんだ一体。…小野寺の体意外と小さいな。なんかいい匂いもするし柔らかいし…はっ、煩惱退散煩惱退散。まだ10秒経たないの!?

「うわあああ！俺の小野寺さんがあ！」

「あいつ絶対許さねー！」

うるさいぞ観客共。もうこれ黒歴史確定だな…

「…お、おいもう10秒経ってるだろ？」

「あ、ばれた？」

この野郎…

俺はすぐ小野寺から離れる。

「すまん小野寺、抱きついちまって…小野寺？」

小野寺の顔を見るとめっちゃ真っ赤だった。

「だ、大丈夫か？」

「ふえっ!? だ、大丈夫だよ! うん!」

「そ、そうか? …おいもうこれゴールでいいよな？」

「…いえ、まだこれでは足りません」

「まだやらせる気かよ!？」

「最後の課題は…彼氏が彼女さんにほっぺにキス！」

「…無理不可能恥ずかしい」

「嫌だとは言わないんですねえ」いざいざ

こいつほんと後で覚えてろよ。

「ほ、ほほほっぺにき、ききキス…!!」

「おい小野寺、間に受けなくていいぞ」

「……ど、どどどうぞ！」

「…お、小野寺？」

小野寺は覚悟を決めたように体を横に向け、目をつぶった。

…これしなきゃいけない流れ？

「さあさあ！」

「いや、俺やるとは一言も…」

「八幡ー！さっさとしろよー！」いざいざ

集のやつ…あいつ後でぶっ飛ばす。

「おい八幡！するな！絶対するな！」

楽は必死だな…

「…比企谷くん！」

「宮本？」

「キスしないとあることないこと噂を広げるわよ！」
ないこと言うなよ!?もうやだ…

「さあ比企谷選手！」

「ぐっ…」

するしかないのか…？

「八幡！もしキスしなかったら校内放送でお前の性癖バラすぞ！」

「うおい!？」

集のやつ何て脅した。そんなことしたら俺の高校生活は終わりだ。

もはや今の俺にはすると言う選択肢しか残ってないようだ。

「…い、行くぞ小野寺」

「は、はいっ」

「…」
「ん…」

そして、俺は一瞬だけ小野寺の頬に口付けをした。

「きゃあああ!!」

「お、小野寺さんの頬が!!」

うるさいな観客！俺だっけしたくてしたわけじゃないわ！

「合格です！無事恋人という証明がされたので1位は比企谷八幡選手！」

「「ぶー！ー！ー！」」

「なんで俺のクラスのヤツらからも非難されてんだよ!？」

「比企谷は後で学級裁判だ！」

「小野寺さんの可憐な柔肌を…あいつ許さん！死刑だ！」

「おーい楽しくしゃかりしろー」

もうやだこの学校…

「…小野寺、大丈夫か？」

「…あ、ありがとうございます」

「…は？」

「…それでは失礼させていただきます」

「え、ちょ…」

「失礼します！！！！ るりちゃああん！！！！」

そう言う和小野寺は猛スピードで宮本の元へ戻っていった。

「ふっ…俺はやっぱり孤高の狼なんだな」

「優勝を祝して！かんぱーい！！」

「寺ちゃん寺ちゃん！比企谷君といっから付き合ってたの!？」

「え!? え、えっと…」

「おい八幡! なんでしたんだよ!」

「仕方ないだろ! 集のヤツにいえ!」

「にやははー! 面白かったぜ! 写真にも収めたし!」

「すぐ消せ!」

「やだよーん」

「小咲、頑張ったわね」

「るりちゃんなんであんなこと言ったの!?!」

「小咲のためじゃない」

「ま、まさかあんなことすることになるなんて…!」

「でも、嬉しかったんでしょ?」

「…うん」

「おい比企谷! お前は死刑だ! 切腹しろ!」

「うるせえ! 俺はもう何言われようと屈しねえぞ!」

「あ! 逃げた! 待てー!!」

「こっち来んな！」

「あいつも大変ね」

「お嬢！このお肉意外といけますよ！」

「小咲、今度はマウストゥマウスよ」

「無理だよ!？」

続く

23 話

「お兄ちゃん！」

「どした小町」

「もうすぐクリスマスだよ！」

「ああそうだな。欲しいもの決まったのか？」

「それもあるけどそっちじゃないよ！」

「じゃあ何だよ？」

「クリスマスと言えば聖夜の夜だよ！または性夜の夜！」

「女の子がそんな事言っちゃいけません」

「小咲お姉ちゃんだよ！」

「はあ？」

「お姉ちゃんをクリスマスデートに誘いなさい！」

「なんで命令形なんだよ」

「小咲お姉ちゃんもきっと待ってるよ！」

「なんで俺が誘わなきゃいけないんだよ」

「……小咲お姉ちゃんのこと好きなんじゃないの？」

「ぶっ！何でそうなる！」

「いや、だってお兄ちゃん文化祭の日に小咲お姉ちゃんが捻挫して劇に出れなくなって文化祭終わったあとにお兄ちゃんが小咲お姉ちゃんのために」

「ちょっと待てなんでそのこと知ってるんだ」

「前小咲お姉ちゃんが嬉しそうに話してくれた」

「あいつ……」

「あの普段外にも出たがらないようなお兄ちゃんがそんなことするなんて好き以外考えられないよ？」

「……みんな楽しそうにしてるのに小野寺だけ可哀想だと思ったただけだ」

「……怖いのか？関係が壊れるのが」

「……別にそんなことない。関係が壊れようと俺は元々のボッチに戻るだけだし、そもそも小野寺のことは好きじゃない」

「……ねえお兄ちゃん。確かにお兄ちゃんはたくさん辛い思いをしてきたんだと思

う。でもその分お兄ちゃんは幸せになる権利があると思う。それにお兄ちゃんのことだし気づいてるんじゃないの？小咲お姉ちゃんの気持ち」

「：別にこのままでいいだろ。高校卒業したらどうせ話さなくなるんだから」

「ほんと素直じゃないなあ：お兄ちゃんは小咲お姉ちゃんのこと好きなの？嫌いな？」

「：嫌いではない」

「あーイライラする！お兄ちゃん!!小町はお兄ちゃんが素直になるまでもう口聞いちゃいけないから！あと冷蔵庫のマッ缶も全部没収！」

「やめてくださいお願いします」

「：じゃあお兄ちゃんの本当の気持ちを聞かせて？」

「：……分からないんだよ。俺はあいつのこと本当はどう思ってるのか。：それに、俺のその：と、友達に小野寺のこと好きなやつがいるんだ」

「そうだったんだ：そのお友達も大切なんだね」

「ま、まあ：大切でないこともない」

「：……ならさ、お兄ちゃんはどうしたいの？」

「…今の関係を壊したくない。…でもそれで壊れるくらいならその程度のものなのかもしれない。…だから俺も進んでみようと思う」

「…うん。小町はいつでもお兄ちゃんの味方だからね」

「…ああ」

「で、話ってなんだよ八幡？」

「…楽は小野寺のこと好きなんだよな？」

「は、はあ!?! なんだよ急に！」

「真面目な話だ」

「…あ、ああそうだよ！」

「そうか…俺もかもしれないんだよ」

「え？」

「…俺も小野寺のことが…す、好きなのかもしれない」

「…」

「でもまだこの気持ちが好きという気持ちなのかよく分らないんだ。…楽には俺の気持ちを伝えておきたかった」

「…そっか。…じゃあ俺達ライバル同士だな！」

「楽…」

「負けねえぜ！八幡！」

「…ああ」

…やっぱりこいつはどこまでもいい奴だな。

そしてクリスマス。俺は小野寺は誘わなかった。まあ結局クラスのやつで集まる

ことになった。

「楽はどうしたんだ？」

「あいつならママの秘書してるわよ」

「どゆこと？」

「…ってこと」

「へえ、お前の母さんやばすぎだろ」

「ちろとくげく!!」

「!ら、楽!？」

なんかすごい勢いで楽が現れた。

「千棘!行くぞ！」

「え? ちょ、ちょっと待ってよ! どこに行くのよ!？」

「決まってるだろ! 高級ホテルのスイートルームだよ!!」

「「……ええっ!!?」」

…どうなるの? これ?

続く

24 話

樂が突然現れ桐崎を高級ホテルのスイートルームに連れ去った事件から数日が経ち、新年を迎えた。つまり今日は元旦。ちなみに樂のあの発言はどうやら桐崎親子の話だったらしい。よく分からんけど。

そして今日は樂達と初詣に行くことになった。

「おっ、八幡こっちだ」

「うす。女子はまだ来てないのか」

「着替えとか時間かかるんじゃないか？」

「桐崎さんとか小野寺の振袖綺麗だろうな。な、樂」

「なんで俺に聞くんだよ。まあ確かに…」

「お待たせ」

「ごめんね、少し時間かかったちゃって」

「なんで舞子くんまでいるのよ」

「今日一緒に行こうって発案したの俺だよ？」

「とりあえず行こうぜ」

「俺中吉だ」

「私は大吉よ！」

「小吉。微妙ね」

「俺も小吉だ。るりちゃんと縁があるね！」

「氏ね」

「ひどいなあ」

「私も大吉だ。八幡くんは？」

「：凶」

「：：：」

「まあそう落ち込むな八幡！ 凶ってほら、もう下がることはないってことだし！」

「そ、そうよ！ 元気だしなさい！」

「わ、私の運分けてあげるね！」

「お前ら慰めるな」

余計悲しくなるだろ。

かんかん

「……」

「…ふう」

「八幡くん何お願いしたの？」

「別に大したことじゃないぞ？健康第一って願っただけだ。あと小町の受験」

「あー小町ちゃんも受験だもんね」

「小野寺は？」

「え？わ、私もそんな感じかな」

「ふーん」

（まさか八幡くんとずっと一緒にいられますようになって言えないよね）

「次どうしよっか？」

「別にすることないし帰ればいいんじゃない？」

「屋台出てるし回らないか？うちのモンも店出してらしいし」

「おっ、いいね」

「俺はかえ」

「さっ、八幡くんも行こっ」

「お、小野寺引っ張るな」

「わあ！これもこれもただよ！」

「千棘はしやぎすぎだ」

「みんな！今日は食べ放題よ！」

「千棘ちゃん楽しそうだね」

「あいつ前の祭りの時も俺をフリーパス代わりに使いやがったんだぜ」

「よし楽、あのプリキュアのお面欲しい」

「自分で買え！っていうかプリキュア!？」

「なんだよ。プリキュアいいだろ。全年齢向けアニメじゃん。

「八幡くん、りんご飴貰ってきたけど食べる？」

「じゃあもうわ」

「おいしいね」

「まあ…そうだな」

「また来年もみんなで来たいね」

「そうだな。来年は俺達も受験だけど」

「また勉強しなきゃね。来年は小町ちゃんとか春もいるかもね」

「そうかもな。もしそれでも集に小町は近づかせんけど」

「あはは…あれ？みんなは？」

「…そういえばいないな」

「ちよつと電話してみるね…あ、るりちゃん？今どこにいる？…うん…じゃあそつちに…え!? う、うん…そ、そうだね。わかった」

「なんだって？」

「結構場所離れちゃったからもう別々で行動しようって」

「まあ人も多いしな。どこかでまた会うだろ」

「そうだね。…もうちよつと見て回る？」

「…少しだけなら」

「! うん！」

「八幡くん射的あるよ。一緒にやらない？」

「こういうの基本取れないからな」

「そうかもしれないけど。わからないよ？」

「やった！」

小野寺のやつp○4 撃ち抜きやがった…

「まじか…」

「八幡くんにあげる」

「いや、小野寺が当てたんだから」

「私あまりゲームとかしないから八幡くんにあげるよ」

「そうか？…じゃあありがたく貰っとく」

「うん」

「次どうしよっか？」

「そろそろ帰ろうぜ。疲れた」

「そうだね」

「じゃあまた学校でな」

「うん。また学校で」

「あれ？小咲？」

「あ、お母さん」

「八幡くんまで。デートでもしてたの？」いざや

「ち、違うよ！他にもいたから！」

「八幡くんありがとね。小咲見送ってくれて。ちょっと上がってかない？」

「いえ。結構です」

「そんな遠慮せずに！ほら！」

「あ、ちょっ！」

「ご、ごめんねお母さんがいきなり」

「気にするな。別に家帰っても本読むだけだしな」

「…」

「…」

「えっと…す、少し着替えたいから…」

「あ、ああ悪い外出るわ」

「ごめんね」

小野寺の部屋に入るのも二回目か。というか今考えるともう俺ボッチじゃなくね？俺のアイデンティティが…

「あれ？…こう…きゃあ！」

「！どうした小野寺…」

「…あ…」

小野寺の叫び声でしたので開けてみると…小野寺は振袖が絡まって下着がちよこちよこ露出した状態になっていた。

「…す、すまん！」

「ま、ま待って！振袖脱げなくなっちゃったから…て、手伝って！」

「い、いやでもな…」

「は、八幡くんなら大丈夫だから！」

「待て。俺が大丈夫じゃない」

「お、お願い！」

「…わ、わかった」

「で、でも目開けないでね」

「どうやって手伝うんだよそれ」

「じゃ、じゃああまり見ないでね…」

「…善処する」

…と言ったもののやっぱ無理。小野寺の胸とか色々見えてやばい。

「こ、こうか？」

「もう少し引っ張って…ひゃあ!!」

「す、すまん！」

なんか変なところ触ったか!! お、落ち着け。いつものクールな八幡に戻るんだ。

「小咲ー、ジュースとお菓子持ってきたわよ」

「うおおお!!」

「えっ、きゃ、きゃあ!!」

突然の小野寺母に驚いた俺は小野寺の方に倒れ込んでしまう。

「…ごめんね小咲、お楽しみ中だった？」 いざや

「あ、あわわわ！」

「す、すまん小野寺！」

「八幡くんも意外と大胆ね」

「ち、違います！これは事故で…」

「そ、そうだよ！お母さん！」

「そんな誤魔化さなくてもいいのに」いざいざ

「！そ、そうだ！小野寺の振袖脱ぐの手伝ってあげてください！絡まったみたいなんで」

「あら、そうなの？あんたドジねえ」

「お、俺外でてるんで！」

なんとか回避したぞ…そもそも最初からおばさんに頼むべきだったんだ。

「八幡くんできたわよ。振袖脱げなかったなら最初からそう言えばいいのに」

あんたが勝手に勘違いしたんでしょ。

「でも嬉しかったでしょ？」

「…ノーコメントで」

「ふふっ、じゃあごゆっくり」

「…お、小野寺さつきはすまなかった」

「う、ううん。手伝わせた私が悪かったし……」

「……」

「……八幡くんは、さ」

「？」

「……好きな人とかいる？」

「……は？なんだよいきなり」

「……私ね……八幡くんのが好き」

続く

25話

「……私ね…八幡君のことが好き」

……俺今なんて言われた？好き？誰が？小野寺が。誰を？俺を。

…幻聴じゃないよな。小野寺の顔からしてそれはない。ドッキリ？

ここは小野寺の部屋だし可能性は低い。というか小野寺はそんなことする奴じゃない。

（わ、私今なんて言った!?こ、告白しちゃったよね!?ど、どうしよう！八幡くと2人きりで嬉しくてなんかついポロツと…ぜ、絶対引かれた！嫌われたかな……で、でも言っちゃったものは仕方ない！もうヤケクソだよ！）

「…は、八幡くんは私のことどう思ってる…?」

「……お、俺は…」

俺は小野寺のことをどう思ってるんだ？嫌い？いやそんな訳は無い。

じゃあ好き？そもそも何で文化祭の時も、小学校の時も、小野寺を助けようとした？俺が嫌だったから。小野寺の悲しい顔なんて見たくなかったから。笑って

いて欲しいから。それは何故だ？

「……俺も…小野寺のことが好きだから…」

「…え？」

……あれ、今口に出した？出したよね？

「……ほ、ほんとに？」

「……………ああ。多分、俺は小学校の時からお前のことが好きだったのかもしれない…」

「う、嘘じゃない？」

「こんな時に嘘つくほど俺は最低男じゃない」

「…じゃ、じゃあ…両思い？」

「…ま、まあそうなるな」

「……八幡くんっ！」

「おわっ!？」

小野寺は勢いよく俺に抱きついてきた。

「わ、私言ってからもし八幡くんに嫌われたらどうしようって、関係が壊れたらど

うしようってすごく後悔して…」

「…まあ言われた時はびっくりしたけどよ。言われて気づいたんだ。ずっと小野寺のことが好きだったんだって」

「嬉しい…すごく嬉しい…」

「…俺もだ」

「…：両思いつてことは付き合うってことだよね…？」

「まあそうなるな。小野寺が嫌なら無理にとは言わないけど」

ここで無理とか言われたらすぐ窓から飛び降りる自信あるぞ。

「そ、そんな事言わないよ！…：恋人同士になるってことだよね？」

「あんま言わないでくれ。恥ずかしい」

「…えへへ…：なんだかすごく幸せ…」

「お前ニヤケすぎだろ」

「だ、だって嬉しいんだもん！…：恋人同士ならさ、八幡くんも名前で呼んでくれない？」

「無理」

「即答!?!…お願い…」

「うっ…ここ、小咲」

「!もう1回!」

「もう言わん。というか前も言ったことあるだろ名前で」

「そ、そうだけど、全然呼んでくれなくなったから…」

「…これからは呼ぶから許せ」

「…もう仕方ないなあ。…八幡くん、改めてよろしくね?」

「おう」

「……」

「?どうした?」

「え、えっと…お願いがあるんだけど…」

「なんだよ?」

「…き、キスして欲しい」

「…まじで?」

「…う、うん」

「……わ、わかった。目閉じろ」

「うん…」

「……」
「……」

「……えへへ、ファーストキスなんだよ？」

「…そんなの俺もだ」

「……るりちゃん達にも報告しなきゃね」

「まじで？絶対集とかからかってくるだろ。…あ」

「どうしたの？」

「い、いやなんでもない」

「楽どうしよう…あいつも小野寺のことが好きはず…1発殴られることは覚悟しておこう。」

「…ふふっ」

「お、おい、腕に抱きつくな」

「恋人同士なんだからいいの！」

「うっ…」

リア充はこんなこと平気でやってるのか。いや、嬉しいよ？でもなんかすごい精神使う。

「今度2人で旅行とか行きたいね」

「まあそのうちな」

「浮気とかしちゃうダメだよ？」

「する度胸もないしそんなモテてる訳でもないんだから安心しろ」

「八幡くんのために料理も勉強しなきゃね」

「無理しなくてもいいぞ。なんなら俺が作るし」

「ううん、私も少しは成長しないと！」

「とりあえず俺はそろそろ帰るわ。夜も遅いし」

「そうだね。また学校でね？」

「ああ。…またな小咲」

「うんっ。またね八幡くん！」

家

……………俺、恋人出来たんだよな。……………!!!???!!!

「…お兄ちゃん、帰ってきてきそうそうどしたの？キモいよ？」

「…今の俺は何を言われても動じんぞ」

「???」

「小町、重大発表がある」

「お姉ちゃんと付き合うことになったとか？」

「……え、なんで知ってるの？」

「ほんとに!?お兄ちゃん!!」

「カマかけたのかよ…ほんとだよ」

「うおおお！お兄ちゃんがついにやったー!!」

「女の子がうおおお！とか言わないの」

「で、どっちから告白したの!？」

「…小咲」

「お姉ちゃんかーまあお兄ちゃんそんな度胸ないしな〜どうせ言われて好きなの気づいたとかじゃないの？」

「…おっしゃる通りでございます」

「全く…お兄ちゃん、ちゃんと大切にするんだよ？お兄ちゃんに彼女なんてもう出来ないんだから」

「ああ。わかってる」

「そうと決まれば今日は赤飯だー！」

そして冬休みも明け、三学期。

「楽、集、話がある」

「なんだよ？」

「えっとな…俺、小咲と付き合うことになった」

「…え？」

「…ま、まじで？」

「まじで」

「……そっか。おめでとう八幡！八幡なら安心だ！」

「…怒らないのか？」

「なんでだよ？それに、小野寺が八幡のこと好きってことなんとなく気づいてたしな」

「まじかよ。全然分からなかった」

「まあ八幡も鈍感だからな〜で、小野寺とはもうキスしたのか？」

「ぶっ!?!…集、お前そういうことしか言わねえな」

「だって気になるじゃんくした？」

「：ノーコメントで」

「したな」

「したね」

「うるせえ。それより楽はどうなんだ？」

「なにが？」

「桐崎と」

「は!? いや、あいつとはフリだって!…まあ悪いやつではないのは知ってるけど」

「ま、仲良くやれよ」

「俺の話はいいから八幡の話しようぜ！」

「ちっ」

「今舌打ちした!？」

「あ、楽。あんた達も聞いたの？」

「ってことは千棘たちもか」

「改めておめでとうございます。お二人共」

「ありがとう、鵜ちゃん」

「やっとなって感じね」

「あはは…るりちゃんには大変お世話になりました」

「比企谷、あんた小咲ちゃん泣かせるんじゃないわよ？」

「わかってる」

「じゃあ今日はパーティでも開こうぜ！」

「そうね。舞子くんなしで」

「るりちゃん相変わらずだな」

「…八幡くんっ」

「お、おい教室で抱きつくなよ」

「…大好きだよ」

「…ああ。俺もだ」

続
く

26話

今日は何の日？そう、バレンタインデー……！　つい前までならバレンタインデーという日があることすら忘れていたくらいだが、今は違う。俺にはもう彼女がいる。…期待してもいいよね？

「俺貰えるかな」

「お前じゃ貰えねえだろ」

「いやでももしかしたらさー」

学校もバレンタインデーということで盛り上がっている。

「八幡、楽チヨコ楽しみだな」

「まだ貰えると決まったわけじゃないだろ」

「いや、八幡は小野寺がいるだろ。俺は…」

「いや、お前も桐崎いるじゃん」

「あいつはフリだって。だいたいあいつ俺のこと嫌ってるし」

そんな嫌ってるようには見えなかったが…

「おはよう」

「小野寺！おはよう！チヨコは？チヨコチヨコ！」

集のやつよくあんなことできるな：

「舞子くん、あなたチヨコくらい貰ったことあるでしょ？」

「いやまあそうなんだけどね、チヨコは貰えばもらうほど嬉しいからね！」

「ふふっ、はい。一条くんも」

「おお！ありがとな！小野寺！」

「じゃあ授業始まるからまた後でね！」

……あれ？俺のは？

「こ、小咲」

「どうしたの？」

「えっと…やっぱなんでもない」

「？」

「小咲！」

「八幡くん？」

「…やっぱり言えるわけねえー！」

「??」

「ど、どうした八幡？」

「…もう倦怠期なのか…」

「そういえば小野寺、八幡にはチョコあげてなかったよな？」

「ぐっ…」

「恋人同士なのに」

「ぐはっ」

楽のやつ 1 発ぶん殴りたい…

「小野寺、もしかしたら八幡のこと嫌いになったとか？」

「俺何してないぞ…」

「でも小野寺ああ見えて実は怒ってるかも」

「もし帰りバラバラだったらそれしかないな…」

「八幡くん帰ろっ」

「お、おう」

…一緒に帰るということは嫌われてはいない…よな？

「それでね…」

どうしよう、貰える気配が全くない。他愛もない話して帰るだけだ。

「あ、あの小咲さん…」

「どうしたの？」

「え、えっとだな…」

いやでも自分からチョコくれなんて言えるわけない。

「…ふふっ」

「？小咲？」

「…：はいっ、これ」

「…チヨコか？」

「うんっ、八幡くんは大事な人だから友達とかにあげるのとは違うのにしたかったんだ」

「…：こ、小咲」

「ど、どうして泣いてるの!？」

「…正直もらえないのかと思ってた」

「ごめんね。八幡くんの顔が面白かったからつい」

「…ありがとな。今開けてもいいか？」

「うん」

「…：美味しそうだ。頂きます」

「どうぞっ」

「…：…」

「あ、あれ？八幡くん？八幡くん!？」

…そういえば小野寺は料理すごい苦手なんだった……

「…ごちそうさまでした……」

「八幡くん！八幡くん！」

続く

2 章

27 話

今回からあの子が本格参戦！ふたりが付き合ったからってendとは限らない。

私の名前は小野寺春！今年から高校一年生！昔から仲良しの比企谷小町ちゃんと今日から同じ高校です！

「いやーついに私達も高校生だね！春ちゃん！」

「うんっ！頑張ろうね！」

「そういえば春ちゃん聞いた？」

「？なにを？」

「お兄ちゃん、小咲お姉ちゃんと恋人同士になったこと」

「……ええー！！？」

「ふわあ…」

「八幡くん寝不足？」

「昨日ちよっと遅くまで起きててな」

「ちゃんと早く寝ないと体に悪いよ？」

「次から気をつけるよ」

「春達も今日から高校生だね」

「時が過ぎるの早いよな。俺達も受験だし」

「八幡くんは大学決めた？」

「将来公務員になればそれでいいしその辺の大学通うつもりだ」

「そっか：八幡くん頭いいからレベルも高いよね：私も頑張るよ！」

「同じ所目指すのか？」

「うん。八幡くんと一緒にいたいし：」

「そ、そうか：まあ俺も分からないところあったら教えるから頑張ろうぜ」

「！うん！」

「八幡く仲いいな」

「なんだよ集」

「なんか恋人同士になってからいちゃいちゃ度がさらに増したよな」

「前からイチャイチャしてたみたいない方するな。今もしてないし」

「お兄ちゃん！！！！！！ お姉ちゃん！！！！！！」

「ん？：春？小町も」

「ど、どうしたの？」

「お、おお兄ちゃんとお姉ちゃんが付き合い始めたってほんと!？」

「：あ」

「知らなかったのか？」

「あー、ごめん伝えるの忘れてた」

「ほ、ほんとなの!？」

「ああ」

「そ、そんな…」

「春ちゃん…」

「大丈夫か？」

「…春ちゃん、カモン」

「小町ちゃん…」

サッパリ

何話してるんだ？

「そ、そうだよね！うん！私も頑張るよ！お姉ちゃん！」

「な、なに？」

「私諦めないからね！お姉ちゃんのこと大好きだけど、お兄ちゃんのことと同じくらい大好きだもん！」

「わー、春ちゃんまさかここで大胆発言するとは」

「八幡、お前意外とモテるよな」

「いや、俺こいつの兄的な感じだから。まあ妹に好きと言われて嫌な兄はいない。さあ小町も！」

「はいはいだいすきだよー」

「……………!! い、今のなし! 今のなし!」

「嫌いなのか…?」

「な、なんでそんな涙目なの!? …うー! き、嫌いじゃないよ! と、とにかく! 私諦めないからねー!!!!」

「は、春ちゃん待って! お兄ちゃんまた後でね!」

なんだあいつら…

「結局何しに来たんだ?」

「…春」

「きゃあああ!!!」

ん? この声…

「今の春の声じゃねえか?」

「いってみよう!」

「どうしたの!?! 一条くん?」

「なにしてんだ?」

俺達が駆けつけると他にも集や宮本などもいた。

「お、お兄ちゃんお姉ちゃん! こ、この人私のパンツ見たんだよ!」

「…一条くん…」

「…楽、1 回表出ろ」

「ま、待ってくれ！別にわざと見たわけじゃ…」

「問答無用！滅殺！」

「ぐはっ！」

わー、桐崎容赦ないな…

南無阿弥陀仏。

続く

お気に入り1000突破記念家族

まだ2件ほど足りませんが笑笑

この話で二件増えることを祈ります！

「パパ！」

「おおう咲、どうした？」

比企谷 咲。小咲と俺の間に生まれた子供だ。今は幼稚園に通っている。まだまだ小さいのですが、すごい可愛い。小町と同じもしくはそれ以上。…思春期になったらどうなるんだろうな。

「あのね！今日みんなとおままごとしたの！」

「そうかく良かったな」

「うん！」

「パパ、咲、夜ご飯だよ！」

「はーい！」

「いつもありがとな」

「もうっ、それは言わない約束でしょ？」

家事全般は小咲にやってもらっている。料理も今じゃかなり上手くなっている。まあたまに失敗することもあるけど。昔じゃ考えられないくらいのお味さだ。ちなみに俺は市役所に務めている。

「早く食べようよお！」

「はいはい。じゃあいただきますして」

「いただきます！」

「いただきます」

「美味しい！」

「ほんと？よかった」

「今日も美味しいな。それにしても、ほんとよくこんなにうまくなったよな」

「いっぱい練習したから…」

「なんでだ？」

「…わかってるくせに」

「わかんないな」

「ママはパパのために料理頑張ったんだよね！」

「さ、咲!？」

「そうかそうか。嬉しいな」

「もうっ…」

「そう言えばね！先生がこれママ達に渡してって！」

「え？…授業参観だ」

「ついに俺達もそれに行く時が来たのか」

ちなみに俺が小学校の時とかは両親は小町の方に行っていた。

まあ別にどうでもいいんだけどね。俺も小町の参観行きたかった。

「ママ達来るよね？」

「もちろん。ね？」

「ああ。その日は休みにしとくわ」

「やったー！えへへ！楽しみにしててね！」

「なにを？」

そして授業参観日。

「小咲〜！」

「よう、小咲、八幡」

「あ！千棘ちゃん！楽くん！」

「お前らも来たのか」

「久しぶり！当然でしょ！」

楽と千棘は偽恋人から本物になり、そのまま結婚した。

まあこいつらなんだかって仲良さそうだしな。喧嘩するほど仲がいいという言葉はこいつらにこそあるのだろう。

「早く行こうぜ。始まっちゃう」

「それじゃあみんな、そろそろアレを渡ししょう！」

「「はい！」」

「ママ！パパ！」

「咲？なに？」

「はいこれ！」

渡されたのは画用紙に絵が書いてあるものだった。

「これママとパパと咲？」

「うんっ！」

「上手だな。俺の目の腐り具合までしっかり再現されてる」

「あ、あはは…咲上手に書けたね！」

「ほんと!? えへへ！」

「これは家宝にしないとな」

「みんな渡せたかな？じゃあ次は作ってきてもらった作文を発表してもらいます！」

「作文？」

先生がそういうと、順番に発表を始めた。

「じゃあ次は比企谷咲ちゃん！」

「はい！…ママとパパへ！いつも遊んでくれてありがとう！ママはいつも料理

作ってくれてありがとう！いつもとっても美味しいです！」

「咲…」

「パパ！たまに変なこと言うけどとっても面白いです！また今度一緒におままごとしようね！」

「咲！愛してるぞ!!」

「ちょっと八幡！あんたうるさい！」

おっとつい…というかなんで千棘が真剣に聞いてるんだよ。

「私はそんなママとパパのことが大好きです!!これからもよろしくお願いします！」

「パパもう1回！」

「あいよ。高い高い」

「えへへ！わーい！」

「それにしても咲、いつあんなの書いてたんだ？」

「私も思った！全然気づかなかった！」

「なーいしょ！」

「えー？教えてよー」

「内緒ったら内緒なの！」

「お、咲見てみろ。お花咲いてるぞ」

「ホントだ！パパ早く降ろして！」

「はいはい」

「たくさんさいてる！」

「咲のやつ、はしゃいでるな」

「ほんと。なんかあんまり似てないね」

「そうか？小咲も結構はしゃいでる時あんな感じだぞ？」

「そうかな？」

「まあ俺に似なくてほんとよかった」

「咲も将来結婚したりするんだよね」

「まあそうなるだろうな」

「あれ？八幡くんなら絶対許さんとか言うと思ったのに」

「いや、1発は殴るぞ？でも咲が決めた相手なら俺はそれ以上は何も言わん」

「なんかお父さんみたい」

「親父さん？そーういや小咲と結婚する時も1発殴られたな」

「お父さん、八幡くんが来る前からあいつはまだか!? ってずっと言ってたんだよ？」

「こっわ。そんな前から殴る準備してたのかよ」

「違うと思うよ。だってお父さん怒ったふりしてたけど顔はにやけてたもん。多分八幡くんとの結婚喜んでくれてたんじゃないのかな」

「：そうだといけどな。聞いても教えてくれなさそうだけど」

「あはは：それは確かに」

「ママー！パパー！見て！花飾り作ったよ！」

「わあ！すごい上手に作れたね！」

「これママにあげる！」

「いいの？じゃあ：似合う？」

「すっごく可愛いよママ！パパもそう思うよね！」

「あ、ああ可愛いぞ」

「…ふふっ」

「な、なんだよ」

「八幡くん、いつになってもそういうこと言う時顔真っ赤にして恥ずかしがるよね」

「仕方ないだろ。こういうのは慣れるの無理」

「見て！咲もつけてみたよ！」

「おお！似合ってるぞ！よし！写真撮ってやる！」

「八幡くん子供愛がすごいよ…」

「なら3人でとろうよ！」

「でも誰に…」

「それは小町におまかせっ！」

「うおっ!?お前どこから出てきたんだよ!？」

「そんなこと気にしない！ほら！お兄ちゃんもならんで！」

「え、あ、おう」

「それじゃあいくよーっ！はいチーズっ！」

この先色んな苦悩があるかもしれない。でもこいつらがいれば何だって乗り越えられる気がする。

「パパ！早く行こっ！」

「はいはい」

28 話

1ヶ月ぶりです。遅くなって申し訳ない…

投稿が遅くなってこいつ投稿するの辞めた？と思った方もいるかもしれませんが、やめるときはやめる、と言いますので。

気を取り直してどうぞ！

はあ…お兄ちゃんとお姉ちゃんがいつの間にか恋人同士になってるなんて…
ほんとなら喜ぶべきことだと思う。私だって嬉しい。

…でもその反面、納得出来ない自分もいる。…だって私は…

「ん？春か」

「…お兄ちゃん」

「何してんだ？もう授業終わったんだろ？」

「うん。ちょっと校内探検しようかなって。お兄ちゃんこそ、すぐ帰りそうなのに。どうしたの？」

「ん？ああ、俺飼育委員なんだよ。本当は楽と桐崎が今日は当番なんだけどよ。あいつら用事あるらしくてな」

「…飼育委員」

「あ、お前も入るか？意外と楽しいぞ？今からちょうど餌やりに行くところだしついてくるか？」

…きつと恋人同士だし私がお兄ちゃんと一緒にいられるのは時々だ。

…これくらい許してくれる、かな？

「…うんっ！」

「わあ！可愛い！」

「ここの学校すごいんだぞ。ワニまで飼ってるんだ」

「わ、ワニ？危険じゃない？」

「まあ危険じゃないって言ったら嘘になるけどな。うちには桐崎というスペシャリストがいるから大丈夫だ」

まじあいつ飼育委員に向いてる。動物と出会って3秒で打ち解けてるもん。一方俺はいつも敵対してるけどな。ちなみに一番のライバルはマルガリータ・ド・佐藤（ワニ）。

「そうなんだ：そいうえば名前とかはあるの？」

「このワニはマルガリータ・ド・佐藤で、カメはロドリゲス4世、そのニワトリはクラッシャー加藤だ」

「そのネーミングセンスなに：」

「さあ？俺が飼育委員になった時はすでに名前ついてたからな」

まあでもつけたやつは厨二病に近いやつだな。うん。

「春も餌やりするか？」

「！いいの？」

「ああ。まあ最初だし……うさぎの市川塩浜定吉とかいいんじゃないか？」

「だからそのネーミングセンスどうにかしようよ……」

「ほら、餌。こいつ大人しいし怖がらなくてもいいぞ」

「う、うん……えいっ」

「餌投げるなよ」

「だ、だって襲ってきたりしたら……」

「うさぎは人を襲ったりしない。もっと近づいて」

「うん……さ、定吉……？ 餌だよ……」

そう言うのと定吉は寄ってきて春の手のひらの餌を食べ始めた。

「……えへへ……可愛い」

「ここの飼育小屋たくさん動物いるから、結構楽しいぞ」

「そうだね……でもワニとかは怖いな」

「大丈夫だ危険になったら俺が守ってやる」

「お兄ちゃん……」

「まさに兄の鏡だな」

「…バカ、ボケナス、八幡」

「おい、小町と同じようなこというな」

「…ふふっ…じゃあ入ろうかな、飼育委員」

「おっ、そうか？人数多い方が助かるし大歓迎だぞ」

「…お兄ちゃんとたくさんいられるしね」

「ん？何か言ったか？」

「なーんでもない！ほら、早く餌やりやろ！」

「お、おう？」

続く

29 話

「あれ？八幡、小野寺は？」

とある平日。いつものように学校へ行くと、小咲の姿がなかった。

「そーいや来てないな……」

「ホームルーム始めるぞー！今日小野寺は熱で休みだそうだ。お前らも風邪ひかないようにな」

あいつ風邪ひいたのか。メールの一つでもくれればいいのに……

「……学校終わったら見舞い行くか」

「すみませーん」

「はーい……ってお兄ちゃん！」

「おう。小咲が熱出したって聞いたからな……見舞いに来た」

「…そっか」 いざいざ

「…なんだよ」

「いやー？ 付き合う前なら、俺なんかが行ってもうれしくないだろ、とか言いそうだったのに今じゃこれですからねー」

「…帰る」

「あー！ 待って待って！ お姉ちゃんもきつと喜ぶから！ ほら！」

「…お邪魔します」

そんなに俺が見舞いに來るのが珍しいか？ 珍しいな。

「お姉ちゃん？ 起きてる？ 入るよ？」

「春？ うん…って八幡くん!？」

「よう。大丈夫か？」

「ど、どうして」

「彼氏として彼女が熱出したのに見舞いに行かないわけじゃないじゃん！ ね？」

「…まあ」

「か、風邪うつしたら悪いよ」

「大丈夫だ。俺には比企谷菌という最強の味方がいるからな」

「…何言ってるのお兄ちゃん」

「…忘れろ。とにかく俺のことは気にするな。ほらリングゴ持ってきたんだ。食うか？」

「あ、ありがと」

「…ちよっと待ってろ。おい春ちよっとこい」

「な、なに？」

「どうしたの？」

「…ちよいと失礼」

「え？ ひゃあ!？」

俺は自分の手を春の額にあてる。…あっつ。やっぱりこいつも熱あるな
「熱あるな。来た時顔赤かったから疑ってたんだ」

「だ、大丈夫だよ私は！」

「だめだ。寝てろ」

「でもそしたらお姉ちゃんの看病が」

「それは俺がやるから気にすんな。というかこれでさらに春の風邪がひどくなった
ら悲しむのは小咲だぞ」

「うう…わかったよ」

「ほら、じゃあ乗れ」

「え？」

「そんな熱あったら歩くのもやっただろ。おんぶしてやるから早く乗れ」

「…こういう時だけお兄ちゃんぶるんだから」

「俺は普段からお兄ちゃんだろ。よつと…」

「…なんかあったかい」

「冷たかったら死んでるってことだからな。あったかいに決まってる」

「そういうことじゃないよ…ばーか」

「…」

「小咲、待たせたな」

「どうしたの？」

「いや、春も熱出してな、寝かせてきた」

「だ、大丈夫!？」

「ああ。少ししたら良くなるだろ。それよりお前だって熱あるんだからあんま興奮するな」

「うん…ごめんね」

「…恋人ならこれぐらい当然だろ」

「…ありがと」

その後俺は春と小咲を交互に看病した。小町が熱出した時とかよく看病したからその知識が役に立ったな。

「…八幡くん？」

「ん？起きたのか。どうした？」

「えっとね…汗かいたから体拭きたいなって…」

「お、おう。じゃあ外出るから終わったら呼んでくれ」

「う、うん」

…だめだ妄想しては。一瞬「私の体拭いてくれない…？」とか言われるかと思っただけだがさすがにそれはないか。

「は、八幡くんいいよ」

「おう……ってまだ着替えてねえじゃねえか！」

「ま、待って！その……背中拭いてほしいの」

「……ワンモアプリーズ」

「せ、背中拭いてほしいの」

「……いや、いいの？」

「うん……恥ずかしいけど」

「……ほんとに？」

「で、でも前とかは見ちゃダメだよ？」

「み、見ないです。見たいけど見ないです」

「……」

……ごめんなさい。本音が出ました。いや、男の子なら仕方ないでしょ？ねえ？
その君！

「……えっと、お願いしていい？」

「わ、わかった………じゃあやるぞ？」

「うん…優しくしてね？」

その言い方だと他のことが始まりそう。

「んっ…冷たい…」

「…あ、あまり変な声出さないんで欲しいんですけど…」

「だ、だって…ぐぐ」

「お兄ちゃん？お母さんが」

「どわあああ！！？」

「え？きゃっ！」

俺が背中ふきに精神を研ぎ澄ましていると、突然ドアがあき、春が入ってきた。それに驚いた俺は前に倒れ込んでしまう。

「…お、おお兄ちゃん」

「…ま、まま待て。これはごか」

「なにしてるのー！！！」

「誤解だー!？」

「…は、早く八幡くんどいてえ」

30 話

みなさん、こんにちは。小野寺小咲です。

私には、比企谷八幡くんという恋人がいます。

彼は普段はひねくれていて、周りから誤解されることもあるけれど、いざと言う時は優しい男の子です。

八幡くんから告白された時はもうどうしようもなく嬉しくて……思い出すだけで顔がにやけてしまいます。

そんな幸せな生活を送っていた私ですが……

「る、るるるるりちゃん！」

「どうしたの。急に電話してきて」

「ちよ、ちよっと〇〇まできて！大変なの！一大事なの！地球滅亡の危機だよ！」

「……なんだかよく分からないけど、分かったわ」

「……で、なんであんたはメガネしてマスクして帽子かぶって変装なんてしてるのよ」

「あ、あそこ！あそこ見て！」

「…あれは…比企谷くん？と………だれ？」

私はお母さんにおつかいをたのまれて、街を歩いていたのです。

そんな時、八幡くんを見かけたので声をかけようかと思った……隣に知らない美人の女の人がいたんです。

「私も分かんないの……」

「随分仲が良さそうね……小咲、これは浮気じゃない？」

「ええっ!?は、八幡くんはそんなことする人じゃないし……か、勘違いかも！」

そう、きつと勘違いに決まってる。そうだよな？

「でも、比企谷くんが笑ってるわよ……？珍しくない？」

「……うう」

「な、泣かないの小咲。まだ浮気と決まったわけじゃ……あ、移動するみたい。行くわよ小咲」

「う、うん」

「次は…映画館」

「も、もうこれデートだよ！どうしようりちゃん……！」

「まさか比企谷くんが女たらしだったとは…明日、問い詰める必要があるみたいね」
翌日

るりちゃんは宣言通り、八幡くんにさっそく聞きに行きました。

私は聞きたくなかったけど、無理やり連れて行かされました。

「比企谷くん、あなた昨日どこで何をしていたの？」

「なんだよ急に」

「いいから答えなさい」

「こ、怖いぞ宮本…？…昨日は家にいただけだが」

嘘…やっぱり八幡くんは…

「嘘ね。私昨日見たの。ちなみに小咲も。あなたが街にいるのを。しかも女の人
と」

「…八幡くん、あの人…誰？」

「見てたのか…」

「比企谷くん、さすがに私も今回は許せないわ」

「は？なにが？」

「ここまできてとぼけるの？」

「……………もしかして、勘違いしてないか？」

「勘違いもなにも、あなたは…！」

「いや、あの俺が千葉にいたときの恩師だから」

「……………え？」

話を聞くと、たまたま東京に来たみたいで久しぶりにあっただけのようです。

「そ、そうだったんだ…！」

「なによ…つまらないわね」

「るりちゃん!？」

「浮気なんかするわけないだろ。俺にそんな甲斐性あると思うか？」

「確かに」

「それに……………お、俺は小咲しか好きになる気はないしな…」

「は、八幡くん…！」

「え、まってイチヤイチヤは他所でやってもらえる？」

「私も八幡くんのこと大好きだよ…！」

「小咲…」

「八幡くん…」

「リア充砕け散れ」

31 話

えー、お久しぶりです。

投稿頻度遅くてすみませんm(̈́:̈́)̈́m

感想、評価等ありがとうございます(・v・)

さて、私事ですが、報告があります。

四週間前くらいから、YouTubeの方でチャンネルを開設しました。

内容はアニメに関する動画を出しています。

映像に詳しいとかそういうわけではなく、趣味程度ですので完成度低いですが、徐々に上手くなればなと思うっております。

YouTubeでリヨチャンネル、と検索していただくとヒットすると思います。良かったら見てください！そしてチャンネル登録を！笑

暖かい目と広い心でおねがいします！

それでは、本編どうぞ！

「えー、突然だが、報告がある。先生な、結婚するから」

「……ええ………?」

まさかの先生結婚宣言。結構人気者だからな、寂しがられるだろう。

「先生結婚するんだ……じゃあ先生も辞めちゃうのかな?」

「かもな……まあ仕方ないだろ」

……ん? 集?

「いやあー! ついにきょうこちゃんも結婚かー!」

今集のやつ様子がおかしかったような……

先生のお別れ会&結婚お祝い会を開いた。

みんな悲しむというよりは楽しむ感じだ。

まあ最後だしな。俺も少し先生と話した。

「あれ？八幡くん、一条君たちがいないよ？」

「ん？…ほんとだな。…ちょっと探してくる」

「どこいった…？」

集のあの一瞬の違和感…集は先生とも特に仲良かったからな。

「…ビング」

「八幡…」

「どうしたんだよお！先生とのお別れ会は？」

「先生とは少し話せたしな。…今は集の相談を聞いてやろうと思ってな」

「あははー…やっぱ八幡は分かるか。楽のやつ気づかなかったんだぜ？」

「まあこいつは仕方ない。うん」

「な、なんだよ！」

「「いーや別にいい？」」

「なんかこいつら腹立つ…！」

「で、するのか？告白」

「…しないよ。これから結婚する人に告白っておかしいでしょ。それに叶わぬ恋っ

てわかってたしね」

「いっそのこと式場から先生奪えばいいんじゃない？」

「あはは、それもいいかもねー。…いいんだよ。もう」

「……俺は言わない後悔より言う後悔の方がいいと思うぞ」

「八幡の言う通りだぜ。先生も言ってたろ？ちゃんと青春しろよ？って」

「それが今だと思うぞ。恋の先輩からのアドバイスだ」アッ

「今の八幡ものすごく腹立つな…でも、そうかもな」

「…集、背中向けろ」

「ん？なんだよ楽…？…いってえ！…？」

楽は集の尻を蹴飛ばす。痛そうだなー（棒読み）。

「いってこいっ！！！」

「……ああ！！！」

「いやー、友情だな」

「八幡、棒読みだぞ」

「楽も早く彼女作れよ。ホンモノの」

「うっせ！余計なお世話だよ！」

「：いつでも相談乗るからな」

「：……ああ！さんきゅー！」

「あ、八幡くん！」

「おお、帰ってなかったのか？」

「うん。まだカバンあったから待ってたの。一緒に帰ろ？」

「ああ」

「：なんか八幡くん清々しい顔してるね？」

「そうか？気のせいだろ？」

「そういえばさっきまで何してたの？」

「ちよっと喝を入れてきたんだよ」

「どういうこと??？」

「そういえば小町が今度飯食いに来いってさ」

「…小町ちゃんが？」

「…まあ俺もだな。暇だったら来てくれ。小町の飯は上手いからな」

「じゃあ今度お邪魔しようかな。あ、私も一緒に料理した方が楽しいかも！」

「それはちよつと無理」

この後小咲にすごく拗ねられました。

最終話

えー、今回でこちらの作品は終了したいと思います。

小咲の恋も実ったので…（正直色んな作品に手を出しすぎて追いつかない）
閲覧してくださった方、ありがとうございます。

よければ他の作品も見てくださいと嬉しいです。

それではどうぞ

「お兄ちゃん！忘れ物ない!？」

「ああ」

俺、比企谷八幡は今日日本を経つ。

大学が無事卒業できたので、恋人が待つイタリアへいくのだ。

小町はわざわざ俺を空港まで見送りに来てくれた。

「小咲お姉ちゃんによろしくね！」

「ああ。俺も会うの久しぶりだけどな」

小咲は高校を卒業したあと、イタリアに留学した。

本格的にパティシエを目指すそうだ。

俺はというと、小咲を支えられるようにとりあえず色々勉強した。

もちろん語学も。恐らく少しのあいだはイタリアで暮らすことになるからな。

「お兄ちゃん…たまには連絡してよ？」

「わかってる。寂しいのか？」

「寂しいに決まってるでしょ！ごみいちゃんっ！」

「最後の最後までごみいちゃん言うな…それじゃあ、行ってくる」

「うんっ！気をつけてね！」

「八幡っ！」

「…ん？ 楽、集たちまで…」

「間に合ってよかった！頑張れよ！小野寺をちゃんと支えろよ！」

「俺達も応援してるからさっ！」

「小咲ちゃんを困らせるんじゃないわよ!？」

「小咲はドジなところもあるからしっかりね」

というか俺がなんか修行しに行くみたいな雰囲気だな…

「…ああ。また時々連絡する」

「お兄ちゃん！」

「…春」

「お兄ちゃん…お姉ちゃんのことよろしくね？」

「…おう。心配すんな」

「…お兄ちゃん、ちょっと顔近づけて？」

「…こうか？」

「…っ」

「っ!?!…な、なにを」

ふいに頬に柔らかい感触が残る。春にキスされたのだ。

「お兄ちゃん！お姉ちゃんと仲良くね！」

「…ああ」

そして、ついに俺は小咲の元へと向かう。

「……あいつ、元気にやってるかね」

小咲のことだし何だかんだ今はちゃんとやってそうだが、最初は不安そうだけど。

もう四年もあってない。浮気とかされてないかな。

なんか外国ってイケメン多いイメージあるし。偏見か。

「…つくまで寝るか」

そして空港についた俺は、小咲の住んでいる家を目指す。

「…ふう。確か地図もらった気が…」

「八幡くんっ！！！」

すると、後ろから懐かしい声がする。

聞き覚えのある、落ち着く声だ。

「小咲…？おっと」

小咲は俺を見るなり涙を浮かべて胸に飛び込んできた。

「…久しぶりだな」

「うんっ…！会いたかったよ！」

「…俺もだ。元気にしてたか？」

「大変なこともあったけど、元気にやってたよ。八幡くんは？」

「俺もそんな感じだ。それにしても家で待っていてくれてよかったぞ？」

「だって八幡くんに早く会いたかったから…」

「…そうか。…じゃあ行くか。小咲」

「うんっ。私、かなり料理できるようになったんだよ？八幡くんに美味しいって言われるように」

「そりゃ楽しみだな」

「…八幡くんっ」

「ん？」

「…大好きだよ」

「…俺もだ」

終わり

なんかすごい適当な感じになりましたが…終わりです！
ありがとうございますm(∩)m

アフターストーリー①

あー、終わりとか言ってましたがアフターストーリー描きます笑
短いものになると思いますがよろしくお願いします。

Twitterの方も新しくアカウント作り直したのでフォローお願いします！
@riyov:hamerun

俺と小咲は結婚した。23歳の時だ。

小咲の修行も一段落して、日本で小咲はお店を開くことになった。

結婚初日に子供も授かったようで、元気な赤ん坊も生まれた。

名前は咲。小咲に似て可愛らしくて…俺に似なくてよかった。

アホ毛があるところなんか、俺の娘なんだなぁと感じさせる。

「パパ！」

「おお咲どうした？」

「呼んでみただけ！えへへ！」

咲ももう5歳になった。まあ娘ってものは可愛いもので、何歳になっても甘やかしてしまふ。特にお父さんはそういうものだろう。

ソースは俺の親父。小町に甘すぎ。練乳に砂糖入れたくらい甘い。

「ただいま」

「おう、おかえり」

「ママあ！」

「咲、ただいま。いい子にしてた？」

「うんっ！」

「待ってねご飯今から作るから」

俺は専業主夫になった。まさか本当になるとは思っていなかったが。家事全般は俺がやっている。料理もやると言ったのだが、小咲曰く、

「せっかく修行したんだもん、みんなに食べてほしいのもあるけど、八幡くんや咲に1番食べてほしいから」と言われてからは小咲がご飯を作ってくれている。

「いただきます！」

「美味しい！」

「ほんと？よかった」

「仕事の後なのに疲れてないか？」

「もうっ、八幡くん心配すぎ。そこは美味しいって言うてくれればいいんだよ」

「いやまあめちゃうくちゃ美味しいが…無理はするなよ」

「無理はするなよ！」

「ふふっ、はあい」

咲が俺の真似をしたのが面白かったのか、笑顔を見せる。

「パパ！ママ！今日一緒に風呂入ろ！」

「え？さ、3人で？」

「うんっ！」

「…咲、ママと入れ。パパはやめとくよ」

「ええ!?なんで？」

だつて娘の前で襲うとかシャレにならん。

「…私はいいいよ？」

「…は？」

「えへへ！あつたかあい！」

「もう咲暴れないの」

煩惱退散煩惱退散。

体を洗うことに集中しろ…俺。

「パパも早く！」

「3人も流石に入れないだろ…」

「ほら、これなら入れるよ」

小咲はそう言っていると咲を抱えて場所を開ける。

「……はあ」

俺は仕方なく入る。小咲と風呂なんて久しぶりだ。

新婚の時はまあ時々入ってたが…思い出すと恥ずかしくなってきた。

「えへへ…」

「あ、あんまりひつつくなよ」

「久しぶりだから…だめ？」

「もうすぐアラサーなんだしそういうのは…」

「…八幡くん、言っていることと悪いことがあるよね？」

「ひっ！…す、すみません」

「もうっ…八幡くんだって興奮してるくせに」

「…これは生理現象だ」

タオルで隠れてるとはいえ、今の体勢は俺の足の間に小咲、小咲が咲を抱えてる状態だ。すぐバレる。

咲の面倒とか小咲の仕事も忙しかったのもあって最近ご無沙汰だった。

ということ俺は悪くない。おさまれ息子よ！

「いいゆだったー！」

「咲、そろそろ寝よっか」

「うん…」

咲もまだ小さいので9時になってくると目をこすって眠そうな顔をする。

小咲は咲を寝かしつけるために寝室へと向かった。

「……一服するか」

煙草は減らす努力をしている。吸うとしても咲の寝た後に、ベランダでしか吸わないようにしている。

まあ減らしてるだけで吸ってる時点で依存しちゃってるのかね俺も。

平塚先生を恨もう。

「八幡くん、体に悪いよ？」

「…1本だけだから」

「…風、気持ちいいね」

「…お前も疲れてるだろ。洗い物とかやっておくから寝ていいぞ」

「……なんだかお風呂入ったら疲れも取れちゃった」

「なんだそれ」

「…八幡くん」

小咲は俺の名前を呼ぶと、肩に寄り掛かってきた。

「好きだよ」

「…俺もだ」

「……最近忙しくて…できなかったし……そ、その…する？」

「…小咲ってむつつりだよな」

「なっ！ち、ちち違うもん！八幡くんがしたそうな顔してるから！」

「それじゃ俺変態みたいじゃねえか……俺多分今日理性効かなくなるぞ」

「…いいよ。八幡くんの好きにして」

「……とりあえず中入るか」

さっきから恥ずかしい内容をベランダで話していた。夜だし隣の家に聞こえてないことを祈る。

「パパー！ママー！起きて！」

「んう…咲…おはよ」

「ママお仕事いいのお？」

「え？……ああ!!こんな時間！ど、どうしよう急がなきゃ！」

「…ふわああ…どした…」

「八幡くん時間見て時間！」

「ん？…げっ！9時じゃねえか！」

「私お店行ってくるから！咲のことよろしくね！」

「咲！準備しろ！」

「もうしたよー！」

「さすが我が娘！ちょっと待っててくれ」

俺は急いで支度を済ませる。

「よし、行くぞ幼稚園に」

「おー！」

…これからは程々にしよう。うん。

捻くれ少年のラブコメディ

著者 リヨ

発行日 2019 年 4 月 30 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/104519/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
